

台湾高雄市寿山々縁の先史遺跡

国 分 直 一

Prehistoric Sites located along the Base of Shou-shan Hill, Kao-hsiung Pref.

by

Naoichi KOKUBU

Among the prehistoric sites located along Shou-shan hill, the Tao-tsu-yuan site is noteworthy to be mentioned.

This site is located in the northern suburbs of Kao-hsiung. In an area of about 200 m north-west and 400 m east-west extension a great number of prehistoric remains are concentrated. A great variety of pottery (superior painted pottery, red-brown undecorated pottery, cord marked and stamp marked, 'lattice work' pottery) can be found there.

This is the first site where painted pottery was found in Formosa. The associated stone implements are mostly polished ones, although chipped artifacts are not completely lacking. Most frequently encountered are stone hoes, plough shaped implements, stone knives, etc. The recorded artifacts were collected during the Second World War. The site, however, was unfortunately destroyed in the course of construction of naval port.

From seeing the red pottery including painted superior ware, gray-black pottery including black polished pottery, and the associated stone implements, there seems to have been recognized close relation between the remains of the Tao-tsu-yuan site and the Feng-pi-tou site situated at the south west extremity of the Shou-shan hills of Kao-hsiung Prefecture.

I 寿山々縁に於ける先史遺跡の分布

高雄市寿山々縁地区に先住民がいたことは先史遺跡の発見されることから明らかである。高雄市に於ける先史遺跡の発見として最も早い例は1924年同市田町附近、電力会社北側の標高15 m乃至20 mの地点で多量の石器が出土、菅谷織右衛門氏により採集されたという。その石器は福井四磨氏の手を経て散逸してしまったといわれる。福井氏の案内によって筆者は1944年遺跡地方を踏査したが、既に地形変更が行われてい

※ 水産大学校研究業績 第425号 昭和39年6月13日 受理
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 425
Received June 13, 1964

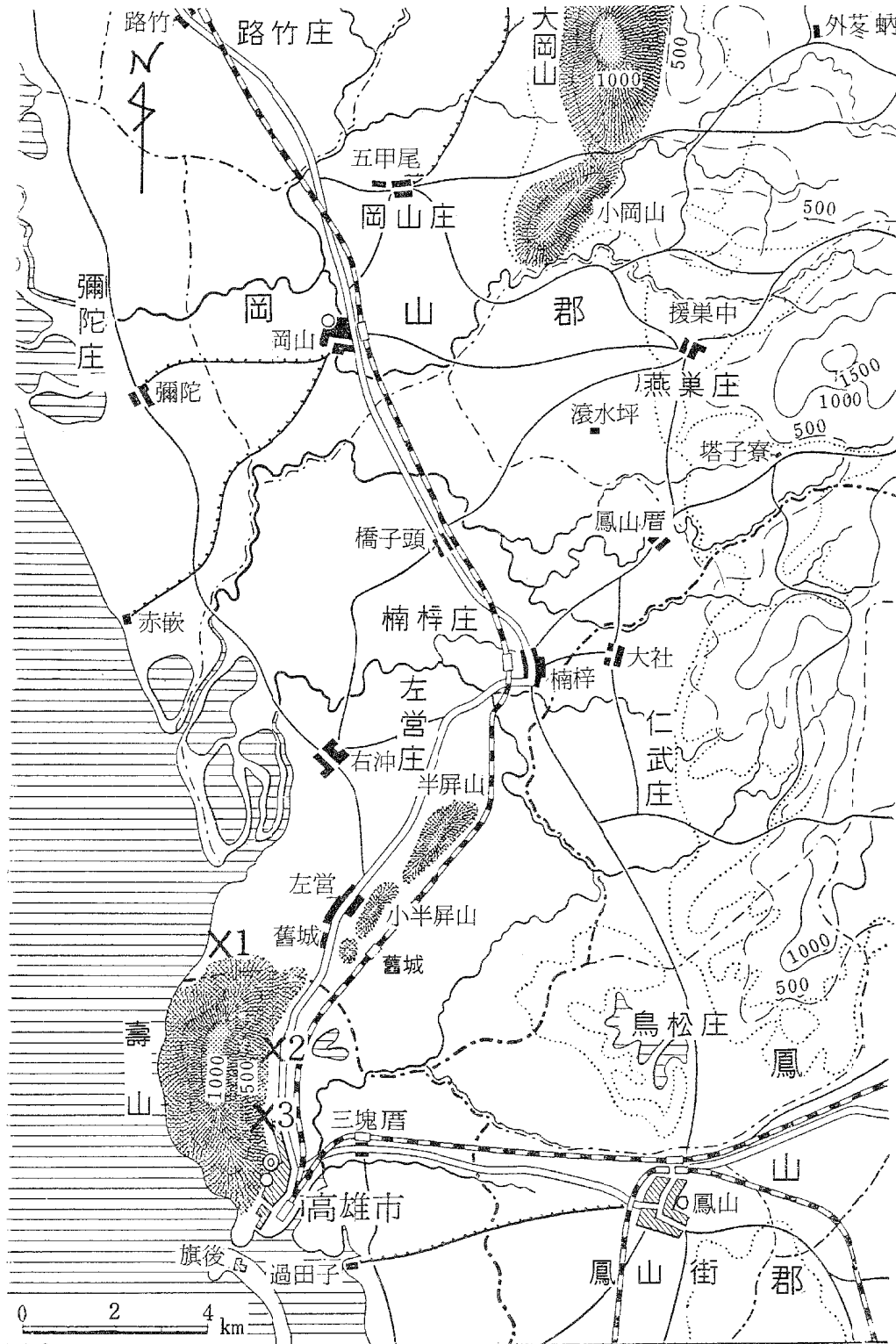


Fig. 1 Map of the coastal district of Kao-hsiung Pref.

- x-1 Tao-tsu-yuan site
- x-2 Lung-shan (龍山) temple shell mound
- x-3 Site completely disappeared

台湾高雄市寿山々緑の先史遺跡

たために、遺跡の状況は全く不明になっていた。(Fig. 1～3) 然し寿山東縁の山脚に接した斜面に遺跡があった状況は想定出来た。同遺跡出土の資料としては福井氏が僅に1例の片刃石器を保存しているのみであった。長さ13.1 cm, 刃部の幅6.1 cm, 背面の中央にバンド状に微弱な浅い溝が加工されたものである。石質は極めて堅く暗青色を帯びている。(Pl. VIII, Fig. 6)

寿山西方の海崖上の沿海道路に近い山中で湯川鹿造氏は片刃石器を採集されている。灰白色の堅緻な石質のものである。長さ13.1 cm, 刃部の幅5 cm。上述の福井氏標品の如く背面の横溝は見られないが類似の片刃石器である。(Pl. VIII, Fig. 2)

以上の遺跡の状況は明かでないが、遺跡の状況の明瞭なものがその後に発見されている。

寿山東北山麓にある龍泉寺(高雄市内惟)裏の貝塚及び洞窟遺跡が1938年土屋恭一氏によって発見された。また寿山北端の旧桃仔園部落の北側海辺に1939年貝塚を伴う広大な遺物包含地区が坂口益雄氏及び筆者によって発見された。1963年4月寿山々緑地方を再訪する機会があったが、龍泉寺裏の遺跡は跡形もなく消えていた。また桃仔園遺跡は第二次大戦末期に破壊されて日本海軍の軍港建設が進められていたが、完成された軍港は中国海軍の軍港として厳重に管理されていた。従って筆者が当時作成した記録、図版写真類は寿山々緑地方の先史遺跡と文化を伝える唯一のものとなるかも知れないと考える。筆者が調査した当時、既に寿山地方は要塞地帯となっていたし、戦局の進展下であったために、極めて不十分な調査しか出来なかった。それにもかかわらず、このささやかな調査記録は台湾先史時代研究の上で空白となっている地区の一部を僅ながら埋めることになるかと考える。

II 高雄市内惟龍泉寺裏貝塚

龍泉寺裏貝塚は山脚の石灰岩の間に出来た小地隙の隙口に堆積したものである。(Fig. 1～2) 厚い部分で僅かに約60 cm。極めて小規模のものであるが赤褐色粗面土器を包含していた。貝の種類は筆者の採集せる標品についていえば次の如くである。

カキ *Ostrea (Crassostrea) gigas* THUNBERG

シオヤガイ *Chione (Anamalediscus) squamosa* (LINNÉ)

ハイガイ *Anadara granosa* (LINNÉ)

ハマグリ *Meretrix meretrix* (LINNÉ)

センニンガイ *Telescopium telescopium* (LINNÉ)

タイワンサルボオ *Anadara cornea* (REEVE)

イナミガイ *Gafrarium tumidum* RÖDING

頻度についていえば、シオヤガイ最も多く、それに次ぐものはカキ・ハイガイ・タイワンサルボオである。

1 土器：赤褐色粗面の壺形土器が行われている。有紋のものは見られない。伴出する土環には赤褐色のもの以外に黒陶質の土環も見出された。西海岸南部地方に広く知られている赤褐色粗面土器文化の系統に属すると思われる。既に黒陶は行われていないが、僅かに土環にその名残を留めていると見られる。

2 石器：石器の発見は極めて少ないが、試掘によって、橄欖石玄武岩(Olivine basalt)製の石斧2が得られた。

3 貝器：タイワンサルボオの殻背部の上部から殻頂部にかけて孔をあけたものが1例出土した。試掘の際得られたものである。この種貝輪は台湾西海岸南部の先史時代遺跡に於ける発見例もあるが、南部西海岸漁村に於いては現代迄網の錘として使用されている。^{*1}

*1 国分 直一 台湾南部新石器時代遺跡発見の貝輪と台湾南部漁村に於いて漁具として使用されている貝輪について
民族学研究 第8巻 第2号 (1942)

Ⅲ 高雄市内惟洞窟遺跡

内惟洞窟遺跡は龍泉寺裏の洞窟群中に仙洞とよばれる洞窟がある。その仙洞に至る途中、寺より約10分の位置に漏斗状をなして傾斜している洞窟がある。洞窟の口より約5 m下ると辛うじて背をまげて入れる位の横穴が約10m位続く。この横穴から殆んど垂直に5 m乃至6 m下ると、洞窟は横に広がる。内部はかなり広いが、平坦でなく、北西に約45° 傾斜している。

大小の落盤のために不安定な感じである。発見者の土屋氏によるに、氏は4回にわたって調査をしたという。第1回の調査に於いて人間の下肢骨、第3回目に頭蓋の一部と上顎部歯牙、石器、第4回目に歯牙、下顎骨の破片を発見したという。また人骨附近に於いて多数の貝殻及びそれに混在して土器の散在する状況を見たという。これら遺物に混じて亜鉛鍍金の施された鋳鉄製品が発見されたという。この鉄器は日本製品なら明治中葉以後、外国製品なら1800年以後のものであろうという。

土器は筆者が再調査した所によると、赤褐色粗面無文土器で明かに先史系土器であり、石器は暗緑色の蛇文岩系の片刃石器(7 cm×5 cm)であることからするなら、鉄器とこれら先史遺物とを関係ある遺物とすることが出来ないことは明かなことである。鉄器は恐らく、遺跡となっていた洞窟中に投げ込まれたものと見てよいと考える。

人骨は金関丈夫博士によるに、熟年一見頑強な骨格の所有者を思わせるという。上顎右側第1門歯の歯槽の萎縮している状態は人工的欠歯の風を思わせるものがあるが、左右相称的でないことと、破損の甚しいために詳細は不明であるとされる。なお注目すべきは歯牙に嚙食の痕を思わせるものがあるとされたことである。

筆者が洞窟で採集した貝の種類は次の6種である。

カキ *Ostrea (Crassostrea) gigas* THUNBERG

ハマグリ *Meretrix Meretrix* (LINNÉ)

タイワンサルボオ *Anadara cornea* (REEVE)

イナミガイ *Gafrarium tumidum* RÖDING

タカナゴスダレ *Katylisia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ)

シオヤガイ *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ)

頻度からいうと、シオヤガイ・タイワンサルボオ・イナミガイが多かった。

出土土器から見ると、この洞窟遺跡直下の龍泉寺裏貝塚出土の土器と全く同系のものである。洞窟遺跡は恐らく、内惟龍泉寺裏貝塚人と関係をもったものではなからうか。洞窟は暗黒である上に不安定であることから見て住居址とは考え難い。人骨は葬骨であると思われる。第一次の埋葬によるものか、再葬されたものであるかは遺骨の状況を見るのが出来なかつたので判断出来ない。人骨附近に発見された貝類は少なくとも葬骨と関係をもっていたものと考えより他なからう。恐らくは死者に供されたものであろう。

Ⅳ 高雄市桃仔園遺跡

高雄市寿山の北端には桃仔園の湾がある。その位置は旧鳳山県城のあった所謂旧城の西方に当り、寿山の北に位置する蛇山の背面に当る地域である。(Fig. 1 ~ 1) 第二次大戦末期日本海軍の軍港建設が始まった当時には蛇山の背部には桃仔園部落があった。台湾府誌所載の鳳山県図によると清朝時代には附近に萬丹港、鑾港の如き港があったようである。海辺の台地状地形が波浪のために浸蝕されつつあることから見て、やや沈降が進みつつあるように思われた。

桃仔園遺跡は当時高雄中学校生徒だった坂口益雄氏によって1939年に発見された。筆者は全年12月はじめて遺跡地を調査して、重要な遺跡であることを知ったが、その後、戦局は進み、軍港の建設が開始されるに

至って、要塞地帯であるために調査困難であった全地区の調査は愈々困難になった。然し地形変改の工事が進行するにつれて、遺物の出土は著しくなり、また包含の状況は明瞭になっていった。非常時の極めて困難な状況下において遺物の採集と掘開壁面に於ける包含状況の観察の便を特別に考慮して下さったのは当時軍港建設を指揮していた宮武海軍中佐であった。然しながら計画的発掘調査は許されず、遺物の建設地区外搬出も、1942年秋頃から困難になった。そして1943年には遺跡の大部分は破壊されるか、コンクリートの擁壁によって囲まれ、また覆われてしまった。この報告は当時、苛烈な戦況下に於いて、然も工事の進行中に辛うじて採集出来た資料と、辛うじて観察記録しておいた遺跡状況についての報告である。

桃仔園遺跡は寿山附近のみならず全島的に見ても規模の大なる遺跡であったと思う。南北約 300m 東西約 350m に及ぶ地域にわたって遺物の散布が見られ、貝の散布する場所が4ヶ所にわたって見出された。土器包含層は、工事による開鑿面によって調査した所では約 1.30m 乃至 1.50m の厚さを示していた。

遺跡の海面向の部分には波浪のために浸蝕を受けていたために遺物は海辺の砂浜及び水中にも発見された。上述したように、この附近には萬丹港があり、清朝時代には船舶の出入した地区であるにかかわらず、清朝時代文献には先住民集落についての何んらの記載も見出られないことからすると、この附近に船舶の出入した頃には恐らく誰にも気づかれない遺跡として存在していたものであらうと思われる。

1 貝 塚

上述したような貝の散布地は4ヶ所にわたって見出されたが、比較的原形の保存されていると見られたのは2ヶ所であって、他は甚しく破壊されていた。何れも海波を望みうる海辺にあり、保存の良好な2例についていえば、両者の間隔約 50 m、北方の貝塚を A 貝塚、南方の貝塚を B 貝塚として記載する。

A 貝塚 切断面について見るに径約 4 m、厚さ約 20 cm を示していた。(Pl. I, Fig 1) 貝の種類は次の如くである。

シオヤガイ	<i>Chione (Anomalodiscus) squamosa</i> (LINNÉ)
ヤツコサルボオ	<i>Anadara gubernaculum luzonica</i> (REEVE)
ハマグリ	<i>Meritrix meritrix</i> (LINNÉ)
イナミガイ	<i>Gafrarium tumidum</i> RÖDING
タイワンシレナジミ	<i>Geloina fissidens</i> (PILSERY)
タイワンサルボオ	<i>Anadara cornea</i> (REEVE)
タカサゴスダレ	<i>Katelsysia (Hemitapes) virginea</i> (LINNÉ)
タカサゴシオヤガイ	<i>Anomalocardia impressa</i> (ANTON)
シラオガイ	<i>Circe scripta stutzeri</i> (DONOVAN)
マドガイ	<i>Pluna placenta</i> (LINNÉ)
オオハナガイ	<i>Chione (Clausinella) isabellina</i> (PHILLIPPI)
カキ	<i>Ostrea (Crassostrea) gigas</i> THUNBERG
センニンガイ	<i>Telescopium telescopium</i> (LINNÉ)
マドモチウミニナ	<i>Terebralia semistriata</i> (BOLTEN & RÖDING)
フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A. ADAMS
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (BRUGUIÈRE)
シマヘナタリ	<i>Cerithidea ornata</i> A. ADAMS
イトマキアマガイ	<i>Nerita (Ritena) lineata</i> GMELIN
カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata</i> (GMELIN)

以上19種の中、頻度からいえばシオヤガイ最も多く、ヤツコサルボオ・ハマグリ・イナミガイ・タイワンサルボオ・タカサゴスダレ・カキ・センニンガイ等は普通に見出され、他は少かった。

B 貝塚 約5 m平方の散布を示していた。(Pl. I, Fig. 2) その中心部をボーリングして見た所, 約25 cmの厚さを示した。貝の種類は次の如くである。

シオヤガイ	<i>Chione (Anamalodiscus) squamosa</i> (LINNÉ)
タカサゴスダレ	<i>Katelysia (Hemitapes) virginea</i> (LINNÉ)
カキ	<i>Ostrea (Crassostrea) gigas</i> THUNBERG
タイフンサルボオ	<i>Anadara cornea</i> (REEVE)
イナミガイ	<i>Gafrarium tumidum</i> RÖDING
シラオガイ	<i>Circe scripta stutzreri</i> (DONOVAN)
ハマグリ	<i>Meritrix meritrix</i> (LINNÉ)
イワウハマグリ	<i>Pitar (Pitarina) sulfura</i> PILSBRY
タイフンシレナシジミ	<i>Geloina fissidens</i> (PILSBRY)
オオハナガイ	<i>Chione (Clausinella) isabellina</i> (PHILIPPI)
イトマキアマガイ	<i>Nerita (Ritena) lineata</i> GMELIN
リスガイ	<i>Polinices (Mammilla) melanostomides</i> (QUOY & GAMIMARD)
キリガイダマシ	<i>Turritella terebra</i> (LINNÉ)
マドモチウミニナ	<i>Terebralia semistriata</i> (BOLTEN & RODING)
フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A. ADAMS
カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulate</i> (GMELIN)
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (BRUGUIÈRE)
センニンガイ	<i>Telescopium telescopium</i> (LINNÉ)
オニシシ	<i>Hemifusus tuba</i> (GMELIN)
スイジョウガイ	<i>Lambis (Harpago) chiragra</i> (LINNÉ)
タイフンオモヒバ	<i>Anomolocardia impressa</i> (ANTON)

以上21種の中, シオヤガイ甚多く, タイフンサルボオ・イナミガイこれにつぎ, タイフンオモヒバ・カキ・シラオガイ・ハマグリ・マドモチウミニナこれに次ぎ, 他は少い。

II 石器

石器に用いられている石材は橄欖石玄武岩, スレート, 砂岩, 珪岩, 石英片岩等多種にわたり, それら石材による石器の発見は多量に及んでいる。石器の種類によって用途にふさわしい石材がえらばれていることは興味深い。

1 玄武岩石器(Pl. IV, Fig. 2, Pl. V, Figs. 7, 8, Pl. VI, Figs. 4, 7, 8, Pl. VII, Fig. 7, Pl. VIII, Figs. 1, 3, 7) 石器として使用されている玄武岩は橄欖石を含むので Olivine basalt とよばれるものである。風化のために橄欖石のみが風化に抵抗して残っているので黒色の橄欖石質が浮き上がっているのが普通である。同石材は澎湖島の基盤をなす橄欖石を含む玄武岩と酷似することについて早く, 早坂一郎博士が指摘されている。

石質は極めて堅緻であるため石斧として用いられている。然しながら用途から見ると, 片刃形式のものを除くと, 石鎌としての用途を示すもの及び大形にして, 犁を想わせしめるものもある。片刃のものは鹿野忠雄博士の所謂生皮搔取具であろうか。

以上の他に用途不明であるが円盤状の石器がある。(Pl. VIII, Fig. 1)

2 スレート石器 (Pl. IV, Fig. 1—1, 3—5 Pl. V, Figs. 1—6, Pl. VI, Figs. 1—3, 5, 6, Pl. VII—Figs. 1—6 Pl. VIII, Fig. 4, Pl. IX, Figs. 1, 4—6, Pl. X, Figs. 1—19)

スレートは石刀(石庖丁, 有柄石刀) 石鎌, 犁形石器, 戈, 銛頭, beater 等に用いられている。

石斧形式のものには用途から見ると石鎌として使用されたものが多いように思われる。背面を平板のまま

にし、片面に磨研調整を加えて土堀に適した刃部を調整している。その大型のものには犁を想わせしめるものがある。最大のもは縦49 cm 幅、刃部に於いて24 cm、中心部の厚さ3.6 cmに及ぶ。(Pl. VI, Fig. 1) 欠落があるので金形は明であるが、有肩形式も見出される。(Pl. IV, Fig. 5)

石刀には所謂石庖丁と有柄石刀とある。(Pl. X, Fig. 19) 石庖丁には半月形の石刀が卓越している。中央部の孔は両側から加工穿孔されているのが普通であるが、1例だけ両側から擦り切手法によって溝を作り穿孔した例がある。同系の黒陶を出す台南県蕃子田遺跡の石刀に同様の技術が見出される。

戈に用いられたスレートは変質スレート。(Pl. K, Fig. 5) 銛頭と見られるものは1例あるが、逆鉤をもたぬもの。下端に近く小孔がうがたれている。(全長20 cm) (Pl. K, Fig. 1)

羽子板状の beater : 土器製作の際、器面調整用の beater に用いられたものでなかろうかと思われるものがある。(Pl. K, Fig. 6)

石鏃には有柄の例はない。無柄にして、有孔のものと無孔のものがある。

3 片岩系石器 (Pl. VIII, Fig. 5)・灰青色火成岩石器 (Pl. IV, Figs. 1-2, VIII, Figs. 2, 6)

石英質、緑泥質の片岩及び火成岩系石器は緻密にして美しい石質を示す。片刃又は片刃傾向の短形厚手の石器に用いられている。その用途は生皮搔取具と見るのが自然であろう。片刃鑿型石器の中には細小の形のものもある。(Pl. IX, Fig. 3) この種のものも鹿野忠雄博士は生皮搔取具と見ておられた。

薄青色を帯びた石英片岩製小品として耳飾が得られている。円形扁平(径3 cm, 厚さ0.2 cm)の薄い円盤(Pl. IX, Fig. 2) その中心に2小孔が並んであけられている。発見例は酷似のもの2例。瑇瑁の両端に装着したものであろう。

4 砂岩石器 (Pl. IX, Fig. 7)

凹石の他に beater と見られるものがある。上述のスレート製 beater に比して、厚く重量もあるので、樹皮布製作に使用される beater を想わしめるものがあるが、全形不明のために決定的なことが云えないうらみがある。

III 土器

最も豊富に見出されるのは赤褐色無文土器。微細砂を含む粗面のものが普通。粗面のものの中には、縄目の叩き文、即ち縄蓆文、格子目の印文を有するものもある。良質のものには磨研面に彩文を施したものがある。(Pl. XII) 混砂粗面の灰色土器、黒色良質の黒色土器も包含されている。

包含層の層序的発掘を行うことは出来なかったが、工事のために掘られたピットの断面について調査した所では、層序関係は確めることは出来なかった。然しながら他地区の状況の中には参考になるものがある。

縄蓆文を有する土器は台北盆地の円山貝塚では最も古い文化層をなしている。又中部地区では縄蓆文土器が黒陶に先行する状況の確認された遺跡がある。

文化層の上から、桃仔園と同系の遺跡であると考えられる鳳山丘陵南端の鳳鼻頭遺跡に於ては黒色土器層の下層に彩色土器層の存在する状況が確認されている。同遺跡に於ては彩陶は縄蓆文土器とともに赤褐色土器文化の重要な要素となっている。^{*2}

澎湖島良文港に於ては磨研赤褐色土器(紅陶)の上に彩画させるものは見出されていないが、縄蓆文土器の口唇に彩画せるものはある。^{*3}

以上の状況から見る時、桃仔園遺跡に於いても縄蓆文土器は彩色土器と同一の文化層に属し、又黒色一灰色土器文化層に先行する文化層であったと見てよいのでないかと考える。以下土器の様相について記載

*2 Tsuboi K., 1953: Feng-pi-t'ou A prehistoric site in South Formosa that yield (red) painted and black pottery Eighth Pacific Science Congress of the Pacific Science Association

*3 国分 直一 澎湖本島における先史遺跡と遺物 本報告 人文科学篇 第5号 1960

する。

1 赤褐色土器 (Pls. III, XII, XVIII)

無文夾砂粗面のものが多い。無文粗面のものについて言えば深い口縁をもつ壺型土器が多い。(Pl. V, Figs. 8, 14)然し口縁にはヴァラエティがあり、浅い口縁をもつものもある。大体に於いて口径20cm—24cm位の日常容器と見られるものが多いが、口径7.6cmに過ぎない小型の壺が1例出土している。口縁に紐でつるすための小孔が二つづつ左右に対象的にあけられている。或は祭器であるかも知れない。(Pl. XVIII, Fig. 1)

赤褐色土器の中には縄蓆文を有するものもある。(Pl. III, Pl. XVI, Figs. 2—4, Pl. XVIII, Fig. 2)全体の器形を示すものはないが、澎湖島良文港出土の縄蓆文土器と同系の壺形土器が登場しているものと見ている。一例だけ肩部以上には磨研を与え肩部以下底部にかけての全面に縄蓆文を施した壺型土器が発見されている。口径19cm, 肩部の最大幅50cm, 高さはほぼ50cmの大型壺であるが、壺底から小人骨が発見された。(Pl. III, Pl. XVIII, Fig. 2)

赤褐色無文土器には壺型以外に鉢形、碗形、豆形も見出されている。また深い口縁の壺に用いられたと思われる蓋も見出されている。(Pl. XXI, Figs. 1, 2)

最も注目すべきは良質の赤褐色無文土器の磨研面上に彩画せるもののあることである。

一は豆形土器の上部の杯状の部分(脚部は失われている)完形を備えてはいないが、杯状の部分の全形は復原可能である。暗赤褐色良質のなめらかな器面に暗紅色の顔料をもって斜に斜状の彩文を配し、口唇部には同様の顔料をもってやや薄く帯状に塗彩した上、外側に縦に短い櫛歯状の彩文を施し、内側にX状の彩文を連続して施してある。(Pl. XII, Fig. 1)軍港建設工事中、宮武海軍中佐が採集された資料の中に見出されたもので出土状態は不明である。他の一例は豆形土器の脚部の上部断片である。土器は内側は黝青色を示し、表面は明るい赤色を示す。その上に暗紅色の顔料で櫛文状の彩文が施されている。(Pl. XII, Fig. 2)軍港建設工事中、海辺に近い台地破壊面に於いて、表面から約50cm深さの面から筆者が採集したものである。彩色土器は赤色無文土器、黒色土器と混在していた。然しながら発掘調査によるものでないから、その包含状況が未攪乱のものであるかどうかは不明である。

2 沈線文或は印文を有する褐色又は赤褐色土器 (Pl. XII, Figs. 1—3, 5)

この種土器の中には、赤色よりも褐色が強く褐色土器とよぶにふさわしいものもある。櫛文状の文様をもつもの。(Pl. XX, Figs. 1—3)格子目状の印文を有するものがある。(Pl. XII, Fig. 5)格子目状の印文は印文をた刻し beater によってつけられたと見られるが、器面に格子目をもつ土製の stamp が1例発見されているので、印文に stamp が用いられる場合もあったと考えられる。

3 黒色土器 (Pl. XI, Figs. 1—7, 11, 15, 16, Pls. X III, X IV, X V, X VI, X K, X X)

灰色土器 (Pl. X XI)

泥質有沢の黒色土器と夾砂粗面の灰色土器は伴存するものでないかと思われる。有沢の黒色土器は最も普通には鉢、碗、盃にわたる器形のものとして行われている。口径は15cm乃至25cm, 器壁の厚さ0.3cm乃至0.5cm。所謂 "Egg shell pottery" とよばれる如き薄くして極めて優れたものは採集されなかった。

灰色土器は夾砂厚手粗面の土器で、器形には深い口縁をもつ有頸の壺型器形が流行している。夾砂粗面の壺形の灰色土器は屢々ネックタイ状に紐帯を頸部に附している。その紐帯には、状或は・状の陰刻が施されている。(Pl. X XI, Fig. 6)

4 土環 (Pl. XX III, Figs. 1—8, 10—12) 土製紡錘車 (Pl. XI, Fig. 12) 土錘 (Pl. XI, Fig. 13)

断面円形又は扁平楕円形を示す土環は泥質の黒陶、赤褐色陶何れにも出現している。但し縦に長い管状の土環はすべて泥質の黒陶であった。他に漁網に使用されたと見られる土錘(赤褐色)が発見される。紡錘車は円錐状のものが、黒陶、赤褐色陶何れの場合にも行われている。

IV 骨器 (Pl. XXIII, Fig. 9)

鹿角に帯状の刻線を入れたものが1例採集されている。

V 土器と石器の共存関係

層位的発掘調査を行うことが出来なかったので如何なる種類の石器と如何なる種類の土器が共存するかは確認されていない。然し土器石器を含む文化様相に於いて桃仔園の様相に酷似する様相をもつ鳳鼻頭遺跡に於いてはある程度確認されているので、その状況から推測することは可能かと思われる。

調査者坪井清足氏によると、赤褐色土器（彩色土器、縄蓆文土器を含む）は三角形の磨研石鏃（スレート製）片刃石刀（スレート製）片刃扁平斧（玄武岩製。屢々有肩形式のものもある）。打製有肩斧（砂岩製）大型拳形石器を伴うとされる。黒色土器、灰色土器は褐色土器を伴い、有茎の磨研石鏃、戈、石刀、石錘を伴うとされる。

VI 埋葬と習俗

小児人骨の壺棺の発見については上述した。地表下 34 cm 口部を上にして安定した状態に於いて埋没されていた。壺底には六才臼齒が僅に生えかけている下顎の一部、四肢の一部、肩胛骨、椎骨、大腿骨、頭蓋（頂）骨、肋骨の一部が発見された。口径 19 cm に過ぎないので、倒底少児といえども屍体を収めたとは考え難いから、取骨壺と見るより他ない。（Pl. III, Figs. 1, 2, 3）

尚、壺棺埋葬地の附近に大人の頭骨が発見された。包含層が破壊されていたので、頭部のみ単独に埋葬されたものであるかどうかは不明である。

肩部から底部にかけて縄蓆文を有する大形土器に取骨した例は1940年、葉石濤、呂憲源両氏によって台南県関屈湖子内遺跡から発見されている。

鹿野忠雄博士は江頭嶼イモル社の一隅で屍体を埋葬した甕棺を発掘されているが、博士は又、一旦埋葬後拾骨して煮壺に納めた例をイラタイ社に於いて調査されている。^{*4} イラタイ社所伝のこの種煮壺には高さ 50 cm に及ぶ大形のものがあるとされる。高さに於いて桃仔園の壺棺に酷似する。

一旦埋葬した後、取骨する習俗が台湾南部先史時代にあったことは明瞭であるが、その時期は赤褐色土器（縄蓆文を下半に有する）時代にさか上って確められたわけである。

壟丁の石棺中の桃仔園発見の取骨壺と器形に於いて酷似し、肩部から底部にかけて縄蓆文を有する点に於いても酷似する小型壺が副葬されていた例が故移川子之蔵博士、宮本延人教授らによって明にされていることもこの際思い起しておきたい。壟丁に於ては彩陶も黒陶も行われていないが、黒陶は僅に土環（黒陶質）に名残をとどめている。又上述したように少児壺棺は小型の副葬品に名残をとどめていることは壟丁文化の中に桃仔園或は同系文化の伝統が伝えられていることを語っているといえる。

V 桃仔園の文化とその文化圏

寿山々縁に分布する遺跡の中、桃仔園遺跡が最も古い文化層を有していたと見られる。同様の文化相を有する遺跡として鳳山丘陵南端の鳳鼻頭遺跡があることについては上述した。

桃仔園遺跡に於いても鳳鼻頭遺跡に於いても、澎湖島の檳榔石玄武岩を石器の材料として使用していることは興味深い。桃仔園の縄蓆文土器は良文港のそれに比してやゝ広い口唇をもつが、同系の文化と見てさしつかえないと考える。

桃仔園、鳳鼻頭の下層の赤褐色土器文化層（縄蓆文土器、彩色土器を含む）に対応する文化層を伝える遺跡としては上述の澎湖島良文港遺跡、台南台地の車路乾牛稠仔遺跡がある。良文港遺跡には黒色土器、灰色土器、印文土器は登場していない。牛稠仔遺跡では彩文土器は未発見である。黒色土器は稀に採集されるが、良文港系縄蓆文土器を主体とする遺跡である。

*4 鹿野 忠雄 インドネシアに於ける甕棺埋葬 東南アジア民族学先史学研究 (1946)

桃仔園、鳳鼻頭の黒色土器—灰色土器文化層に対応する遺跡としては、台南台地の六甲頂遺跡、二層行溪南岸の太湖遺跡等がある。これらの遺跡に於いては既に、縄蓆文土器も彩色土器も登場しない。

黒色土器、灰色土器の登場しない赤褐色無文土器の遺跡は黒色土器—灰色土器文化層期以後に展開したものと考える。黒色土器—灰色土器文化層期に石器殊にスレート石器が盛行するが、赤褐色無文土器単行の遺跡に於ては石器の出現が極めて乏しくなる。全く石器を伴わぬ例もある。龍泉寺裏遺跡はこれら、台湾南部先史時代後—末期遺跡の一つである。

最後に大陸の先史文化との関係にふれておきたい。

坪井清足氏は鳳鼻頭の彩色土器を華南海豊地区の彩色土器文化と密接に類似するものがあることを指摘した。また台湾南部の黒色土器文化を海豊谷地から揚子江の南部にかけての同様の文化の前哨の一つであることを指摘している。然し大陸文化との関係については金関丈夫博士により、より早い時代により広い範囲にわたって検討されたことがある。^{*5} 筆者も亦大陸との関係に言及したことがある。^{*6}

彩色土器、縄蓆文土器を伴う華南系の赤褐色土器文化の渡来の一つのコースが澎湖島を經由しているらしいことは既に述べてきたことから推測出来ると思う。然しながら、華南系の黒陶、灰陶は澎湖島には発見されていないことからして、全島を經由してはいないのでないかと見られる。黒陶—灰陶文化は台湾西海岸中部及び北部地区にも出現するが、中部地区の黒陶灰陶は南部地区のそれらに比してヤゝ特色を示している。また北部地区の黒陶は火度高く、印文硬陶を伴う点に於いて、出現の時期はより下ると考えられる。

黒陶—灰陶系文化の台湾への登場はほぼ同時代に、南部と中部に別々の波として澎湖島をかすめるか、同島を經由せずして行かれたものでなかろうか。そして更に下の時期に台湾西海岸北部に印文硬陶の文化が波及したものであろう。火度の高い後期黒陶は印文硬陶文化に随伴するものであろう。

寿山周辺負塚出土具類の同定は金子寿衛男講師（台北大学質学教室）によるものである。

*5 金関 丈夫 台湾先史文化に及せる北方文化の影響 台湾文化論叢 (1953)

*6 国分 直一 有肩石斧有段石斧及び黒陶文化 台湾文化論叢 (1953)

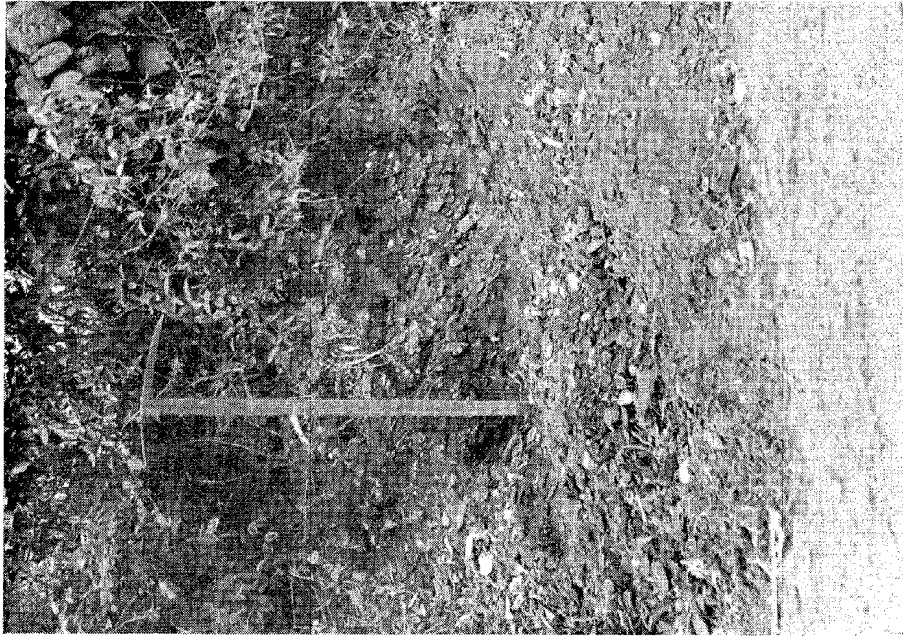
P L A T E

PLATE I

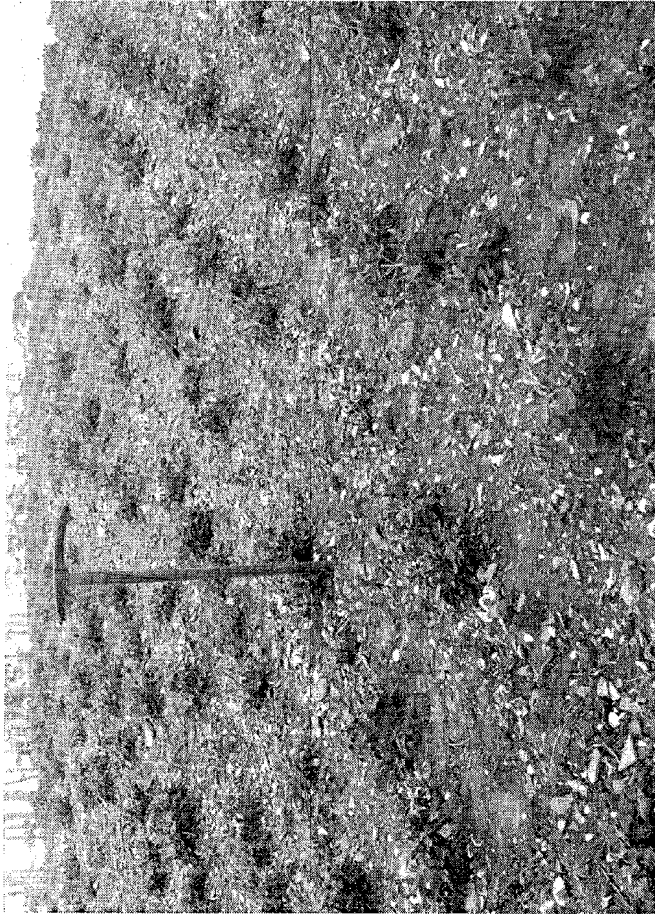
Two views of shell mounds

- 1 Location A
- 2 Location B

PLATE I



1



2

PLATE II

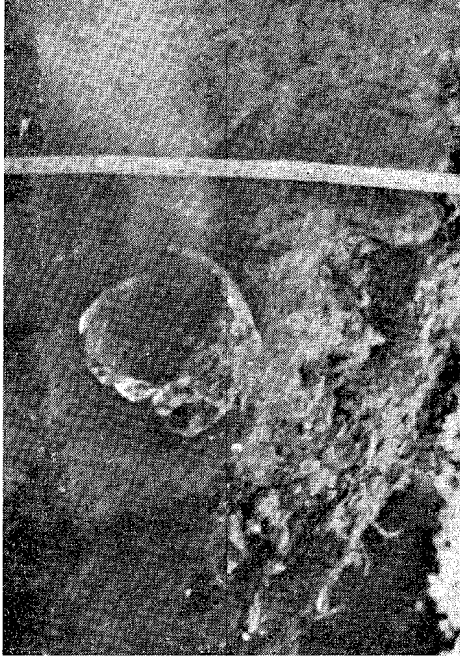
Three views of Tao-tzu-yuan site

- 1 Scattered potsherds found prior to the construction work
- 2 Destroyed part of the site containing abundant potsherds
- 3 Cranium exposed under the harbour construction

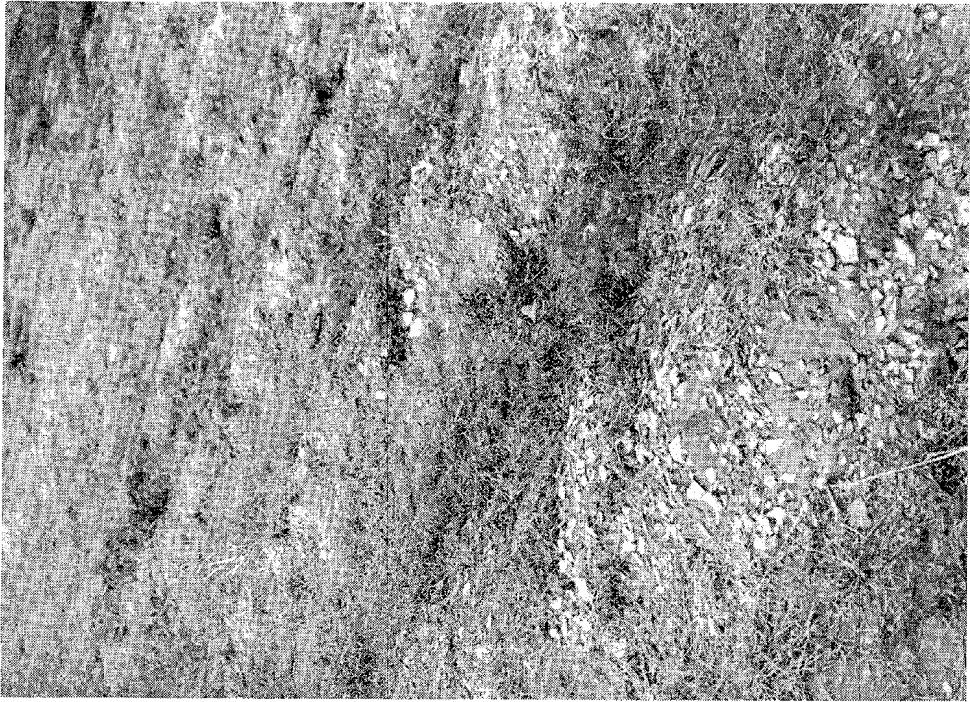
PLATE II



2



3



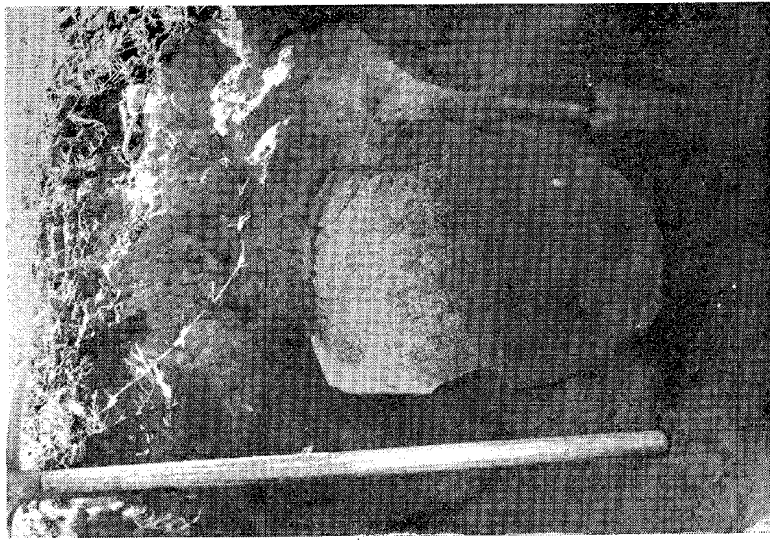
1

PLATE III

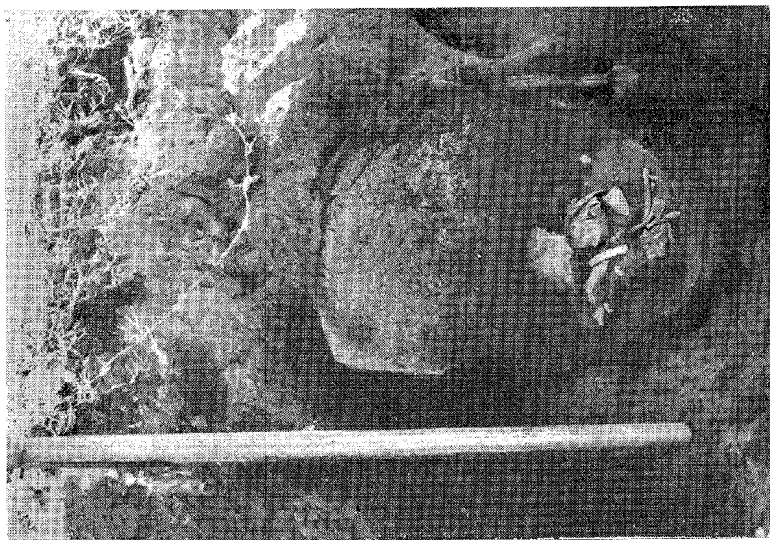
Jar coffin

- 1 Jar coffin exposed under the construction work
- 2 Child bones remained at the bottom of the jar
- 3 Inside view of jar after packed earth and bones were removed away

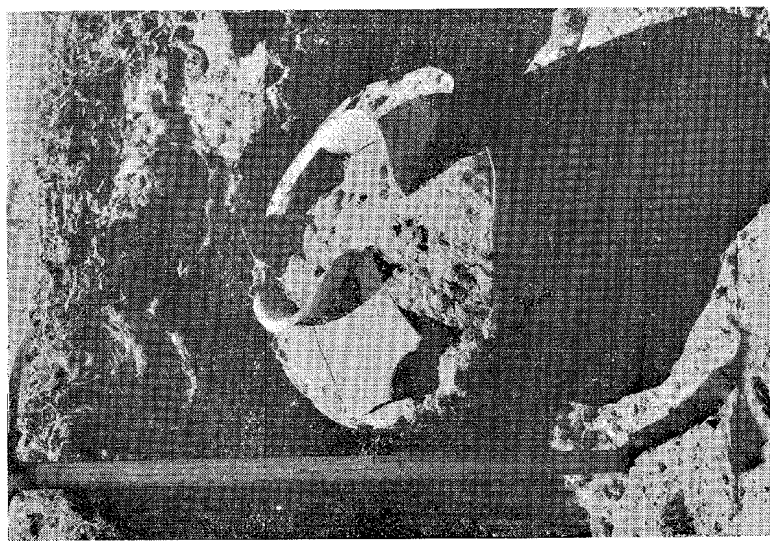
PLATE III



3



2

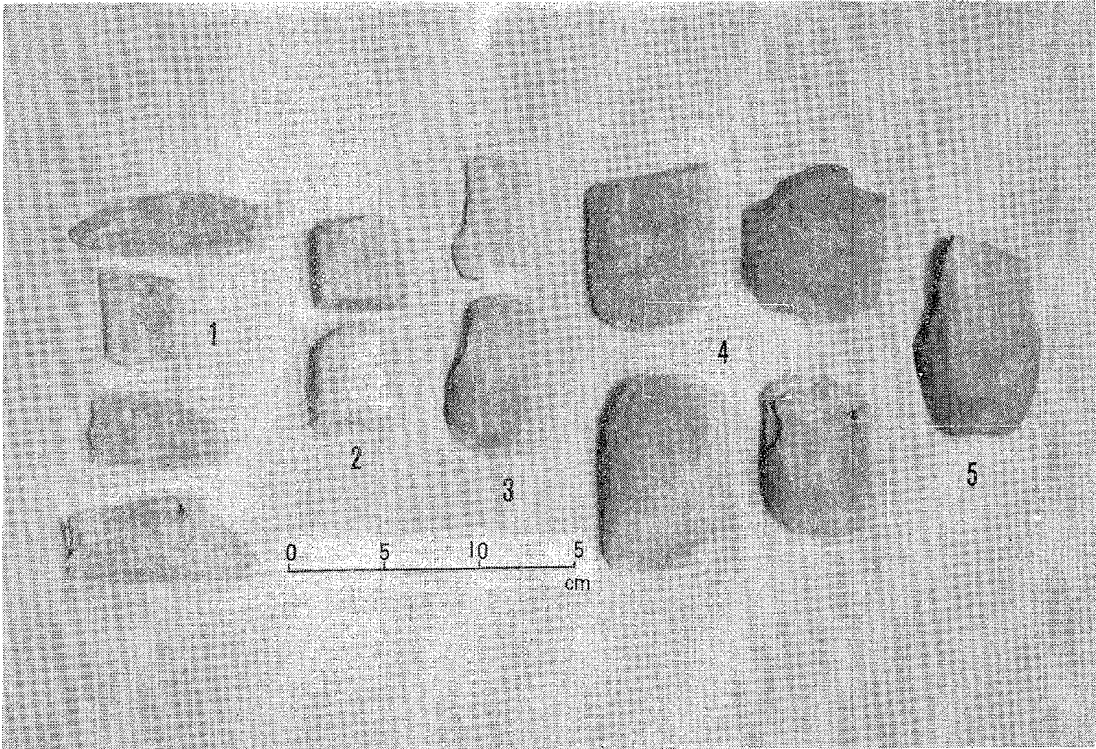


1

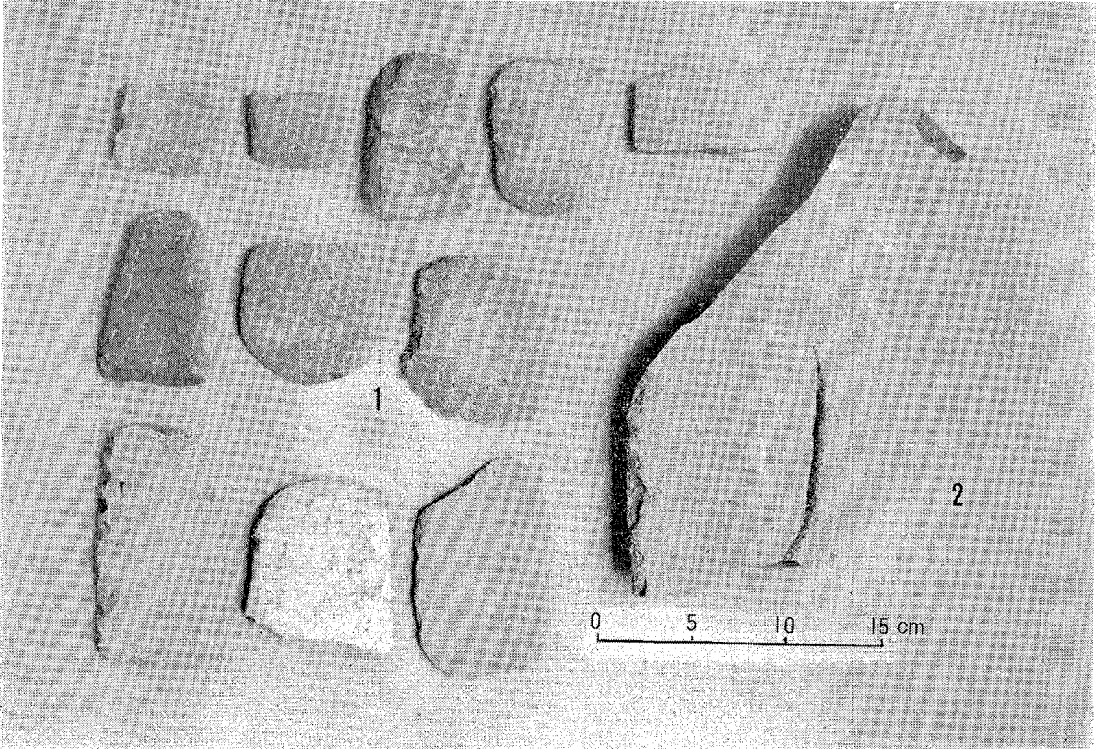
PLATE IV

Stone implements

- 1 Implements with exception of No.2 (bluishgray eruptive rock) are of slate
- 2 Implements made of olivine basalt



1



2

PLATE V

Stone implements - 1

Implements with exception of Nos. 7, 8 (olivine basalt) are of slate

PLATE V

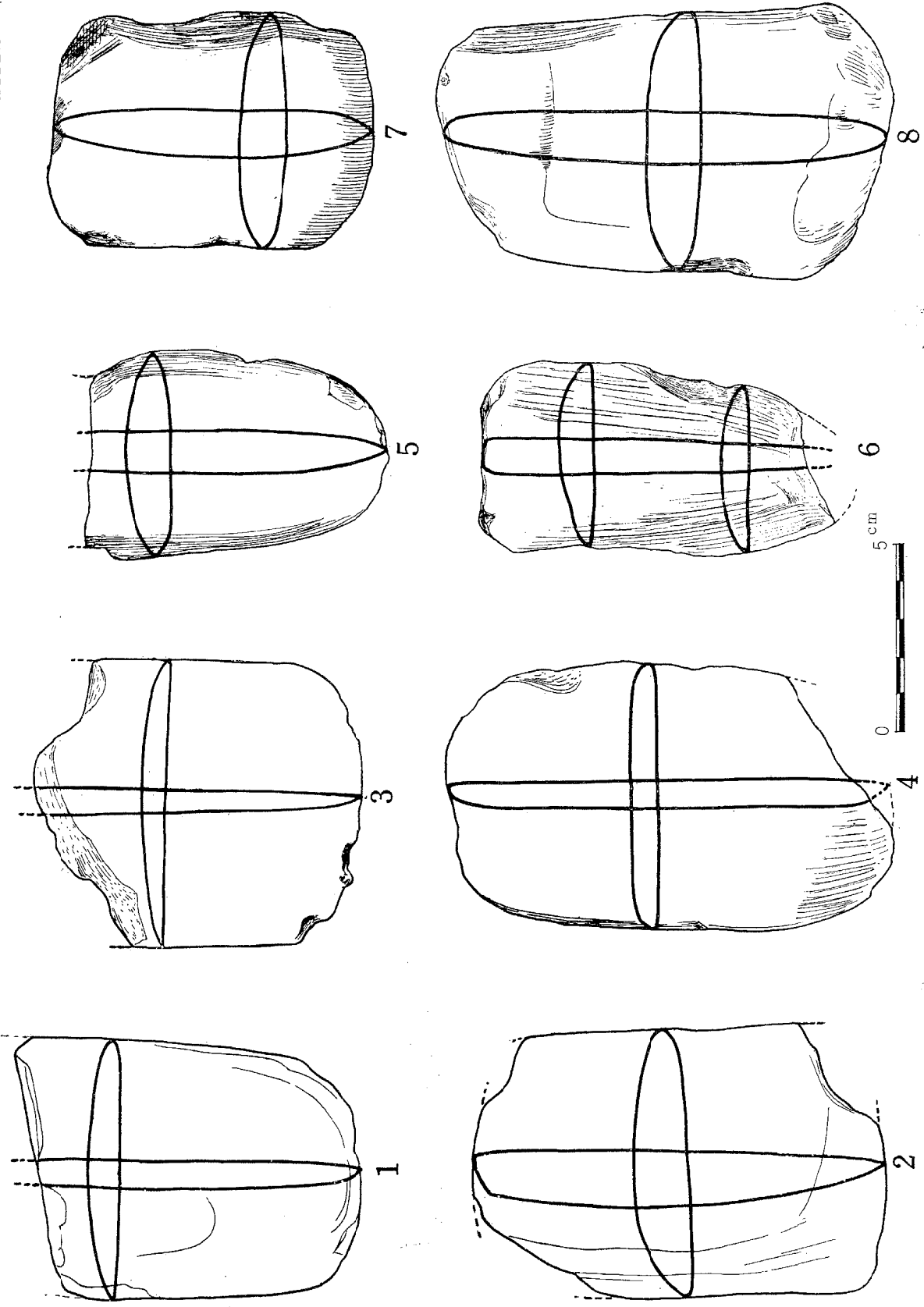


PLATE VI

Stone implements - 2

1-3,5,6 Implements made of slate

4, 7, 8 Ibid, olivine basalt

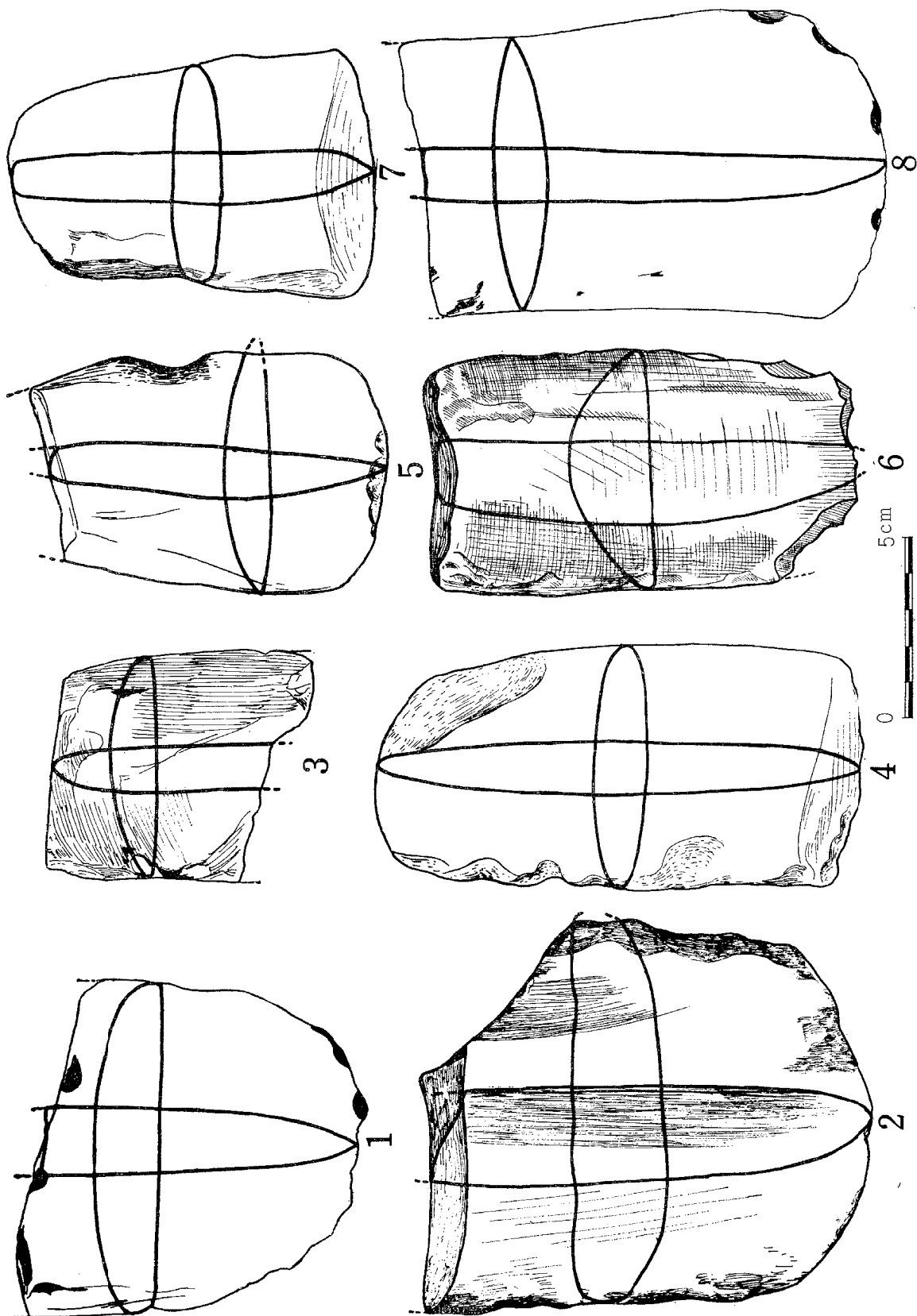


PLATE III

Stone implements - 3

Implements with exception of No. 7 (olivine basalt) are of slate

PLATE VI

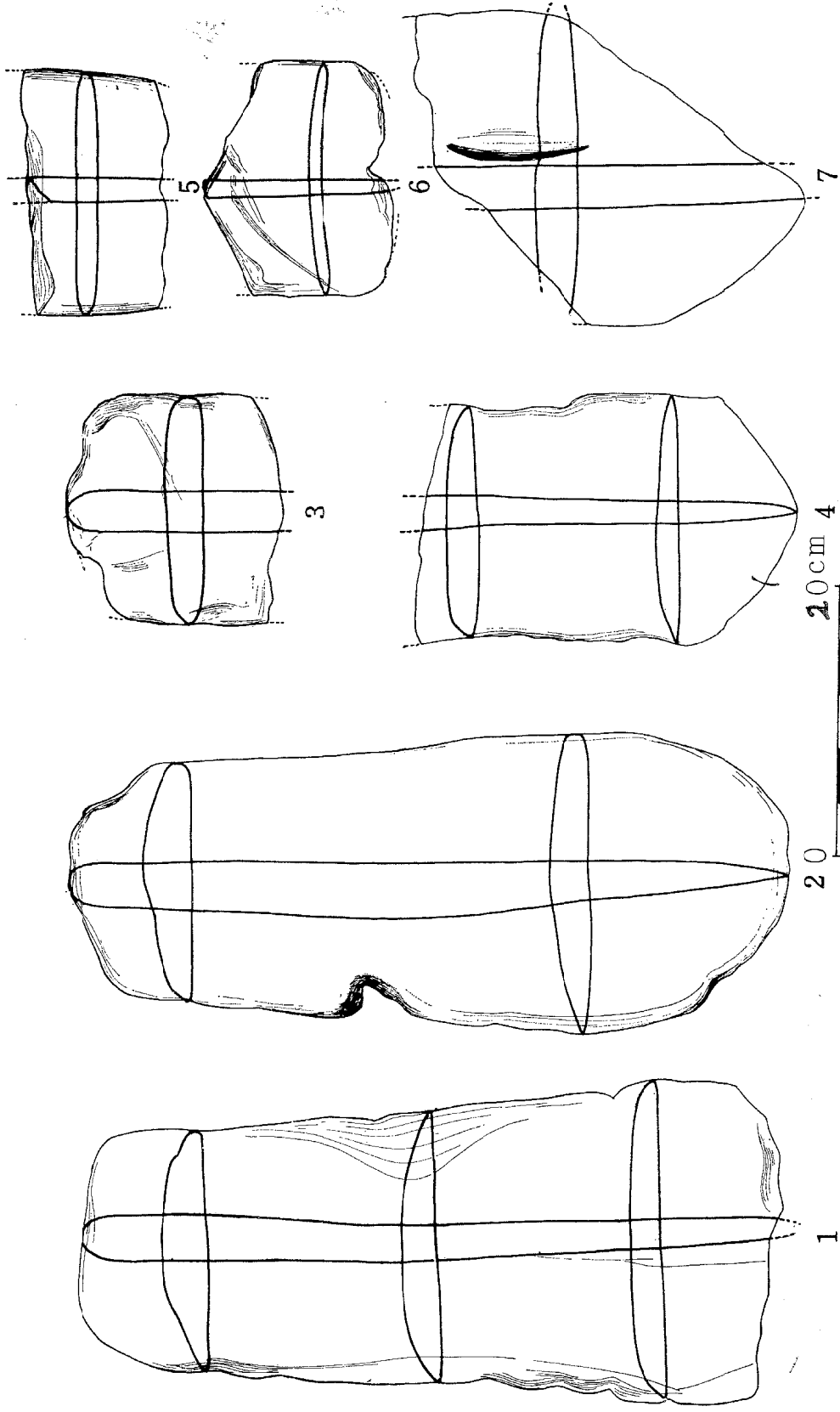


PLATE VIII

Stone implements - 4

- 1,3,7 Implements made of olivine basalt
- 2, 6 Implements made of hard grayish blue eruptive rock
- 4 Implement made of slate
- 5 Implement made of bluish gray eruptive rock

PLATE VIII

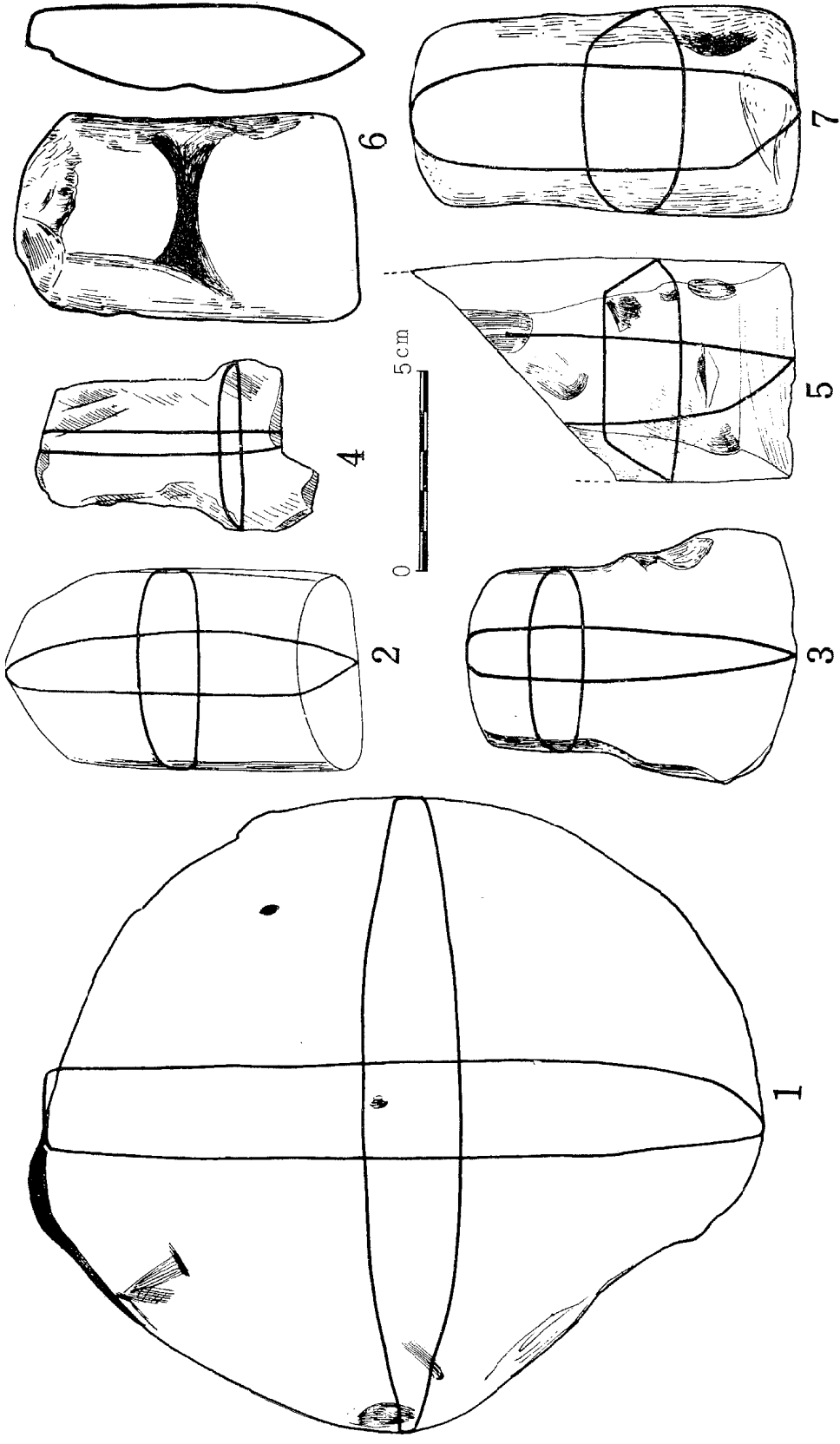


PLATE X

Stone implements - 5

- 1, 4, 5, 6 Implements made of slate
- 2 Implement made of quartz shist
- 3 Implement made of hard bluish rock
- 7 Implement made of sand stone

PLATE K

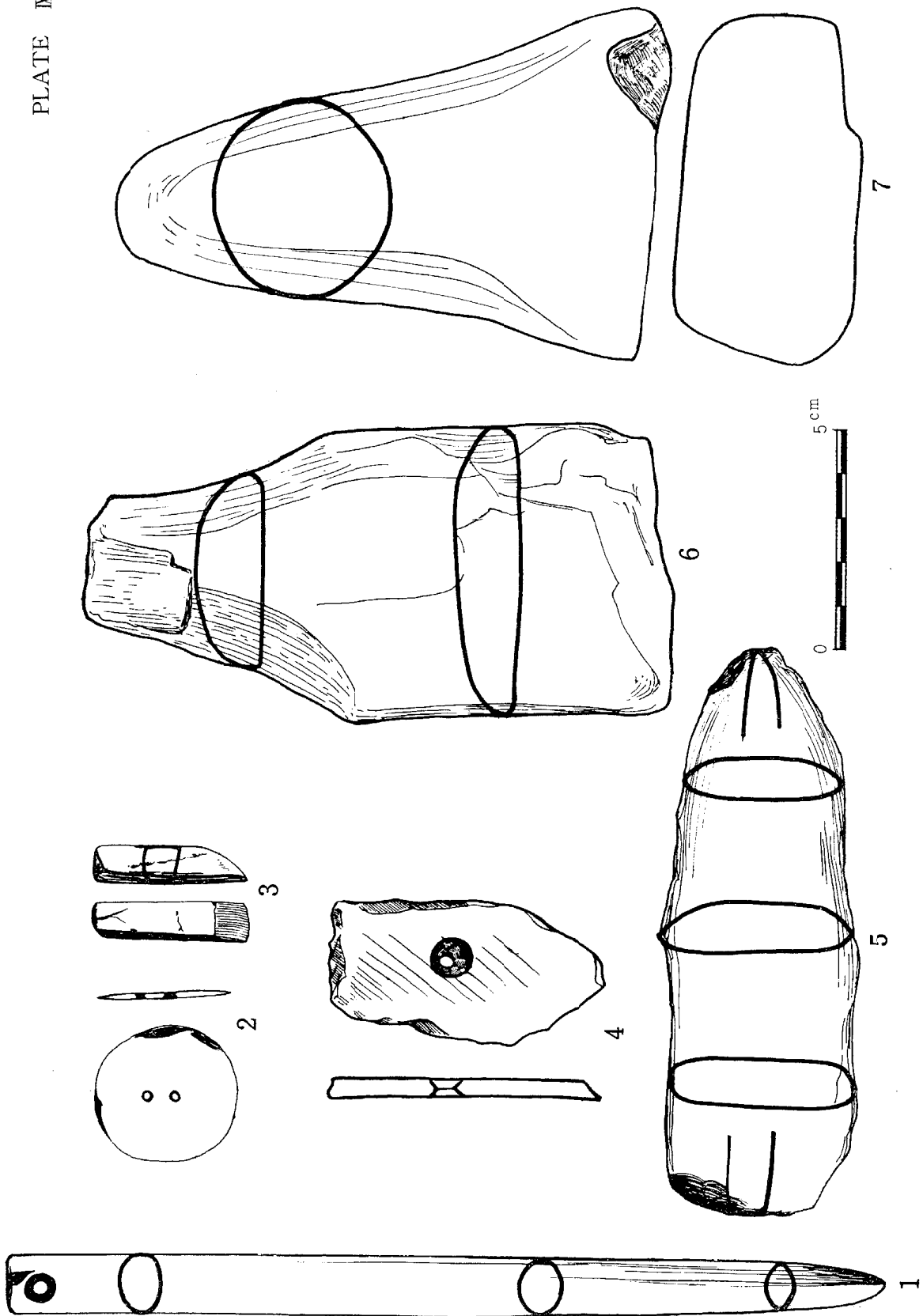


PLATE X

Stone knives in slate

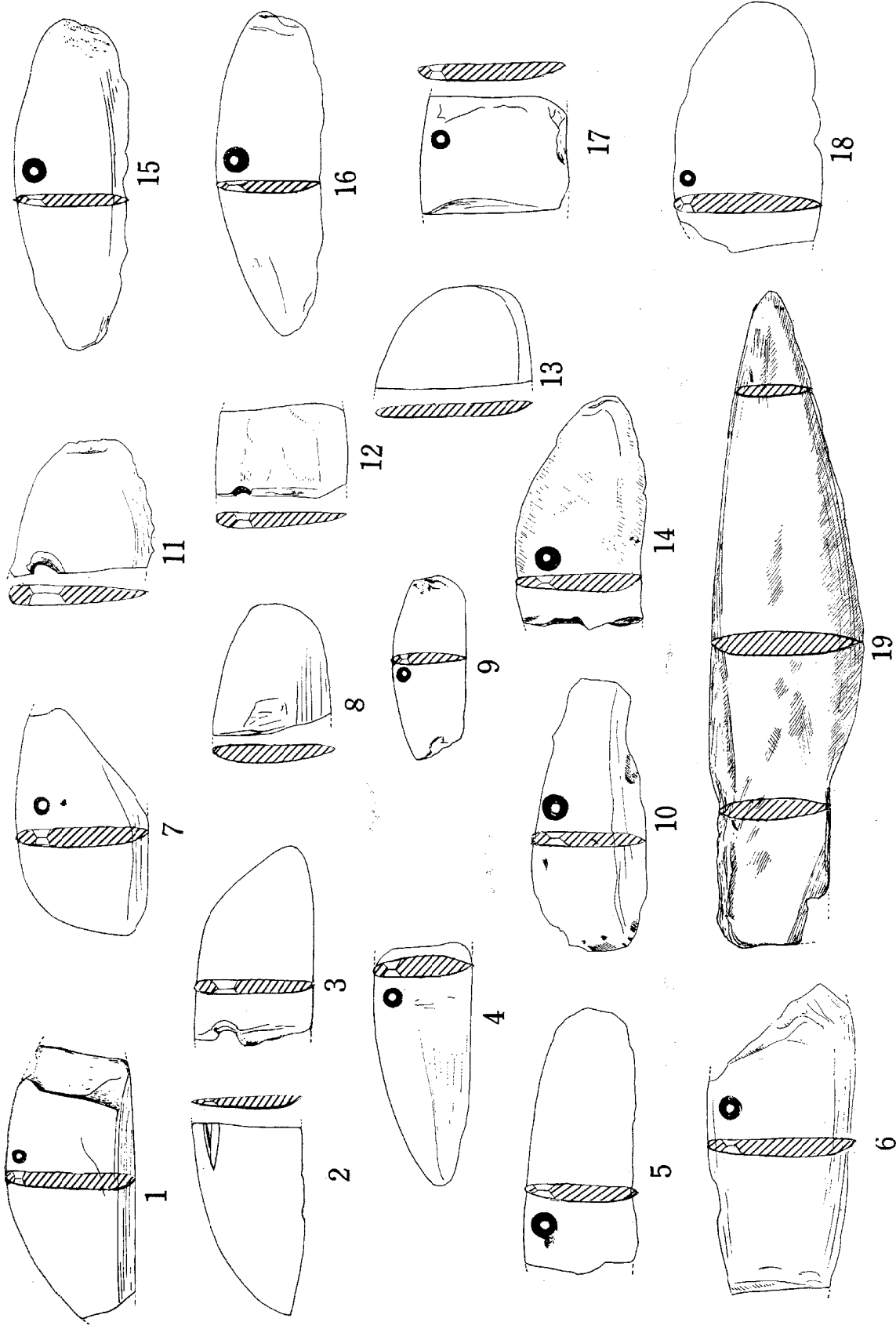


PLATE XI

Pottery wares

- 1 Fragment of bracelet (black ware)
- 2-7, 9, 11, 15. 16 Fragments of vessels (black ware)
- 8, 14 Neck parts of reddish brown wares
- 10 Nods of lids (left, black ware; right, reddish brown ware)
- 12 Spindle whirls
- 13 Sinkers (reddish brown wares)

PLATE X

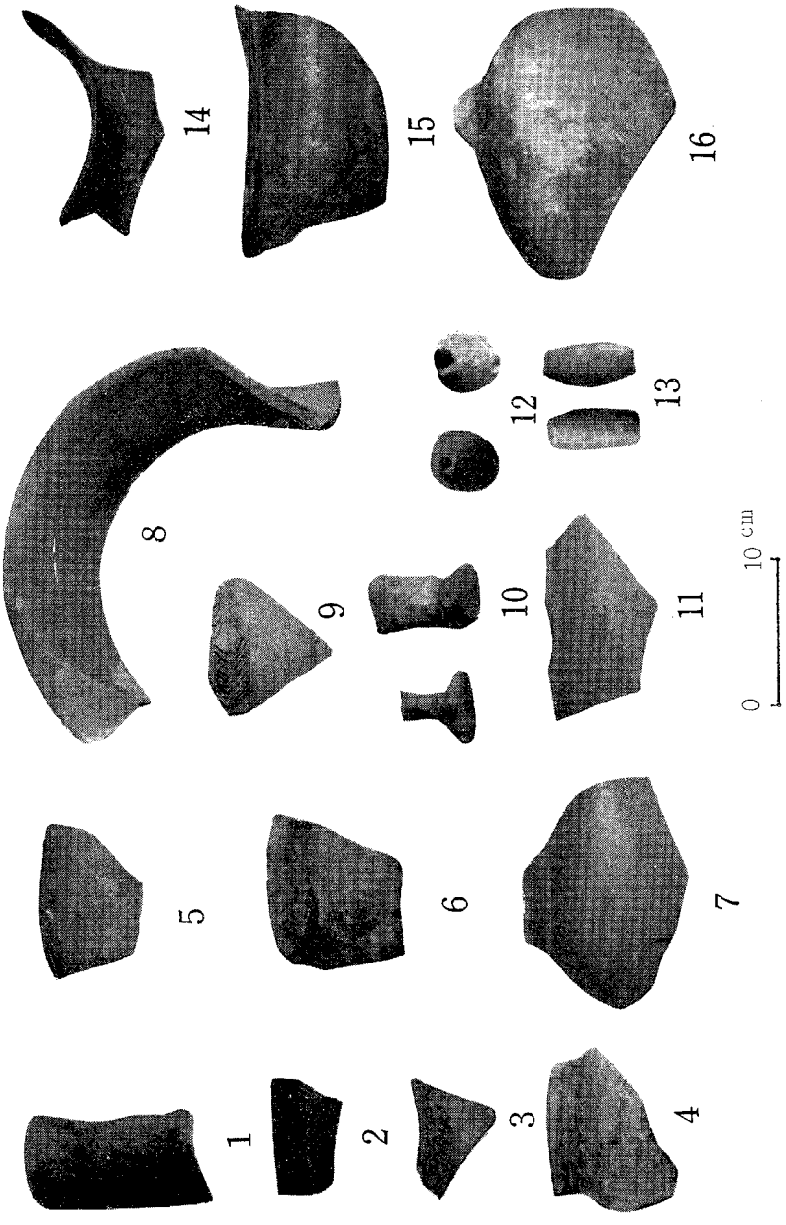


PLATE XI

Red wares painted with geometric designs

1 Tou type vessel

2 Fragment of leg part of Tou type vessel

PLATE VII

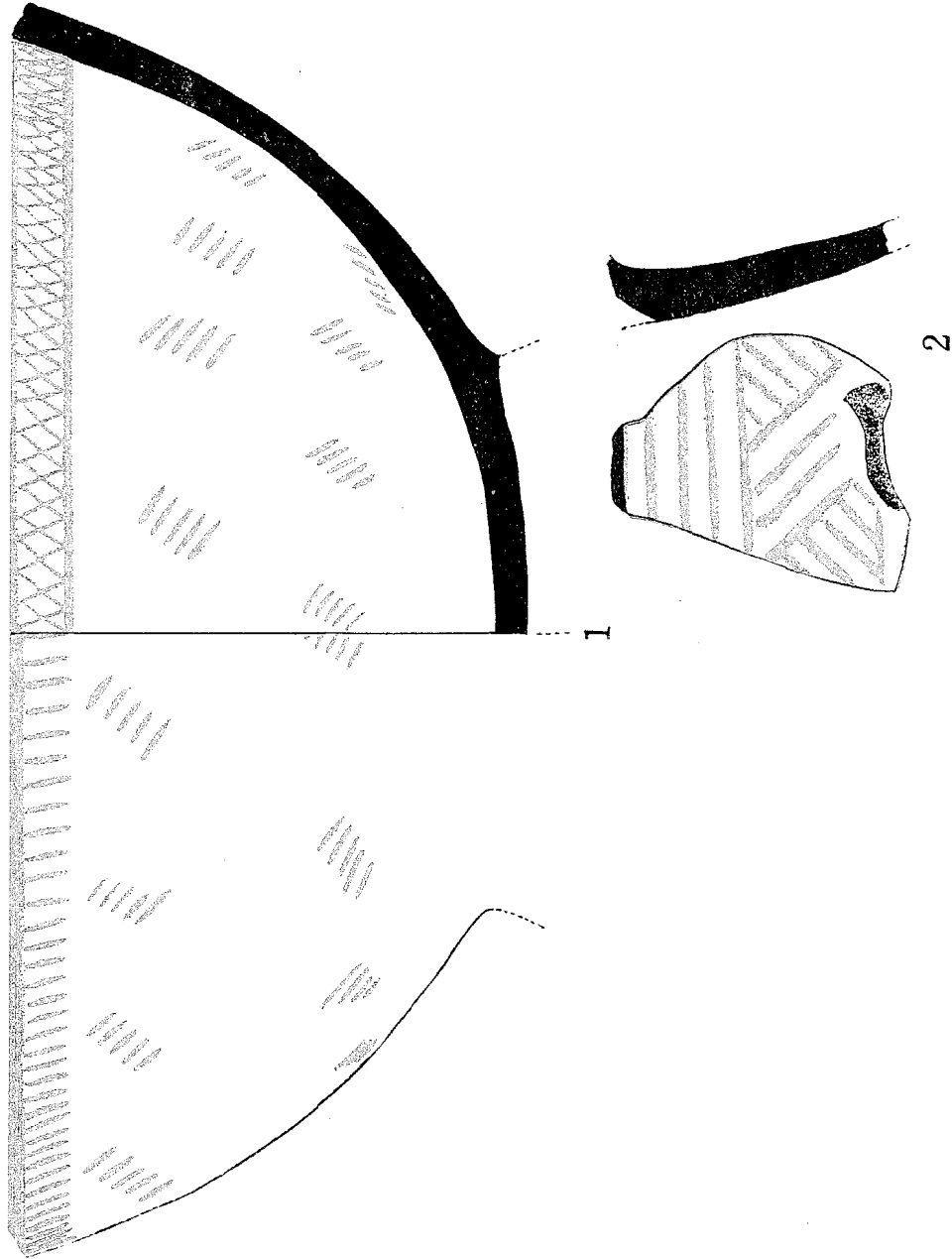
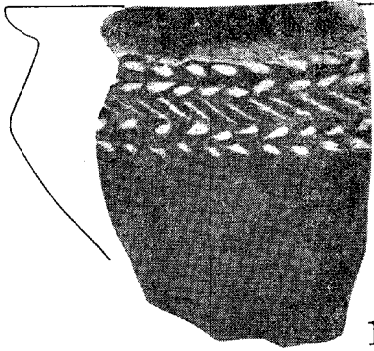


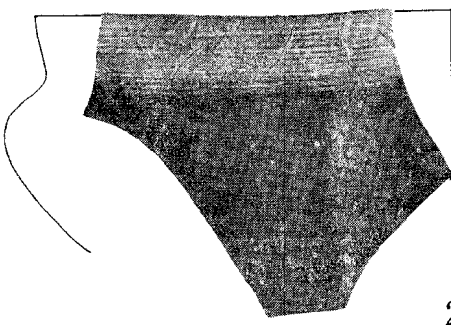
PLATE X III

Rubbings of black wares - 1

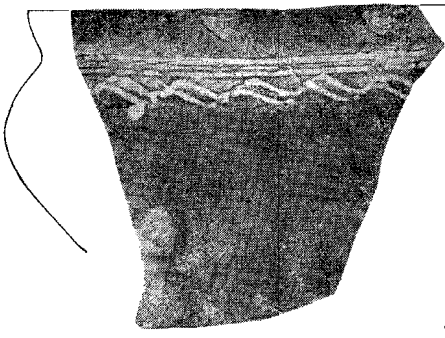
PLATE X III



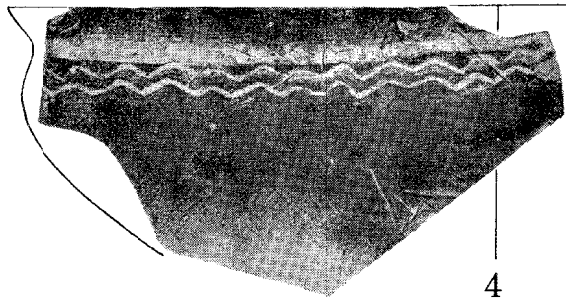
1



2



3



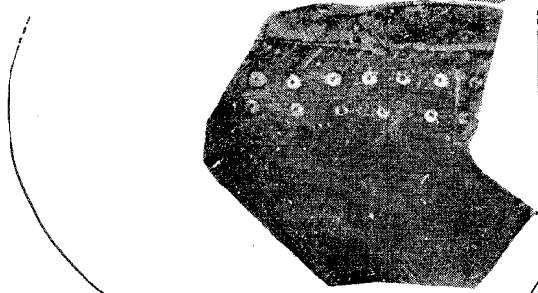
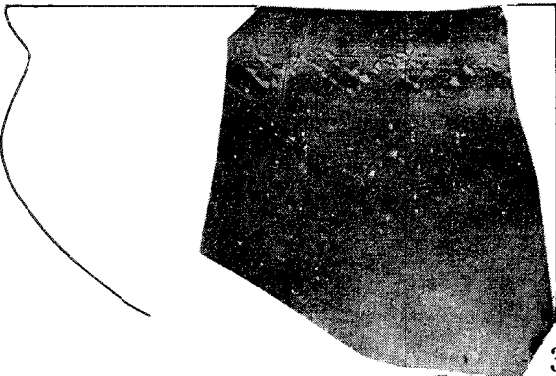
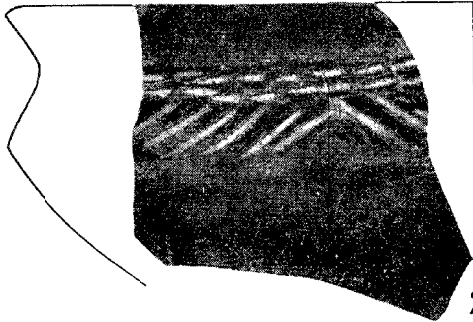
4



PLATE X IV

Rubbings of black wares - 2

PLATE X IV

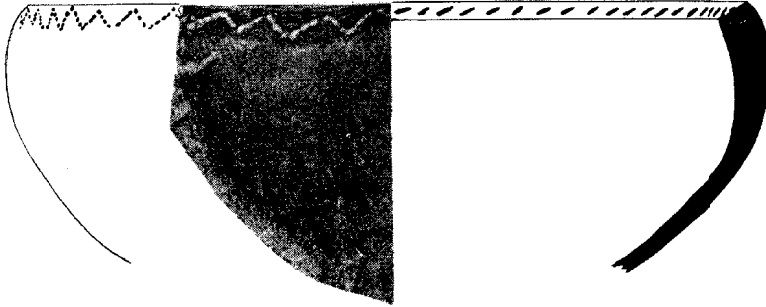


0 5 cm

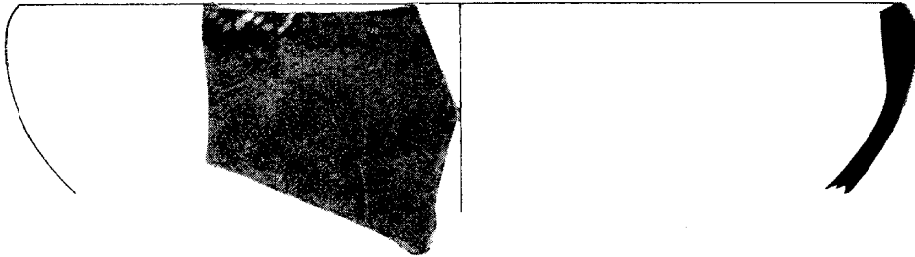
PLATE XV

Rubbings of black wares - 3

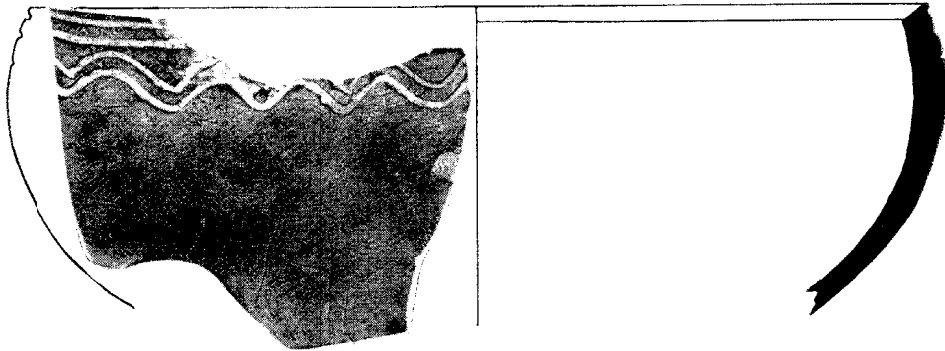
PLATE XV



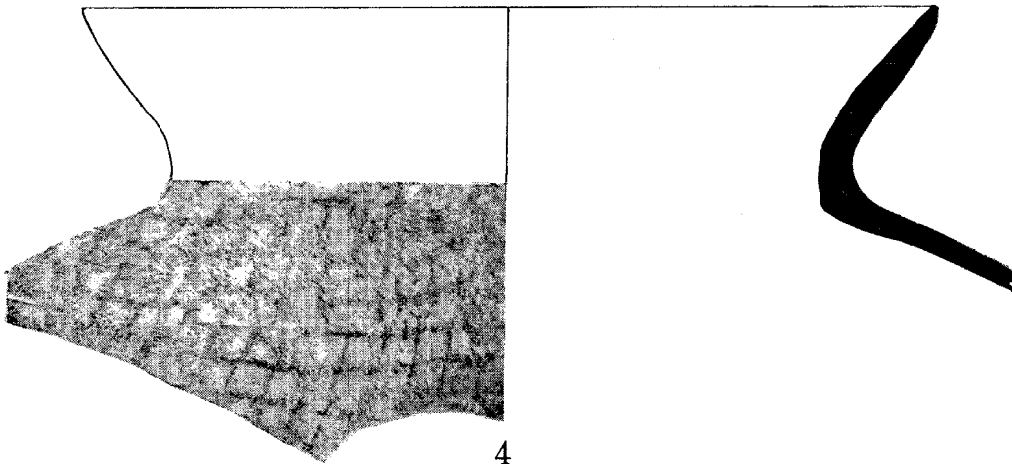
1



2



3

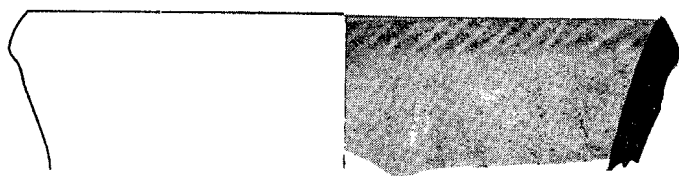


4

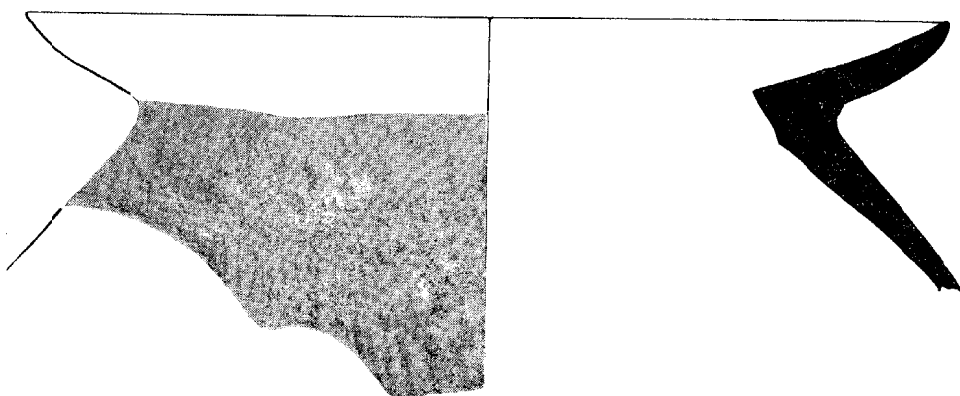


PLATE X VI

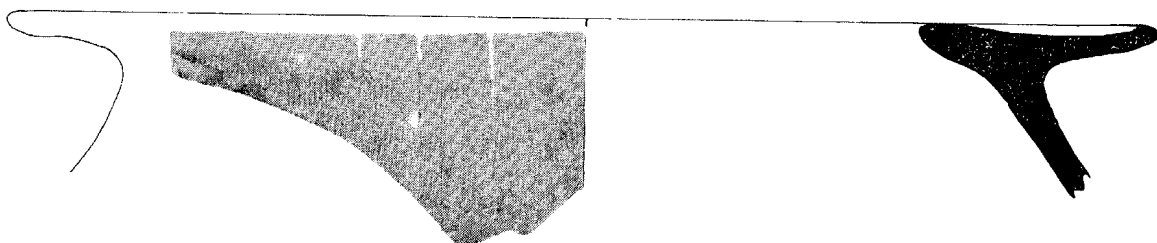
Vessels reconstructed, reddish brown wares - 1



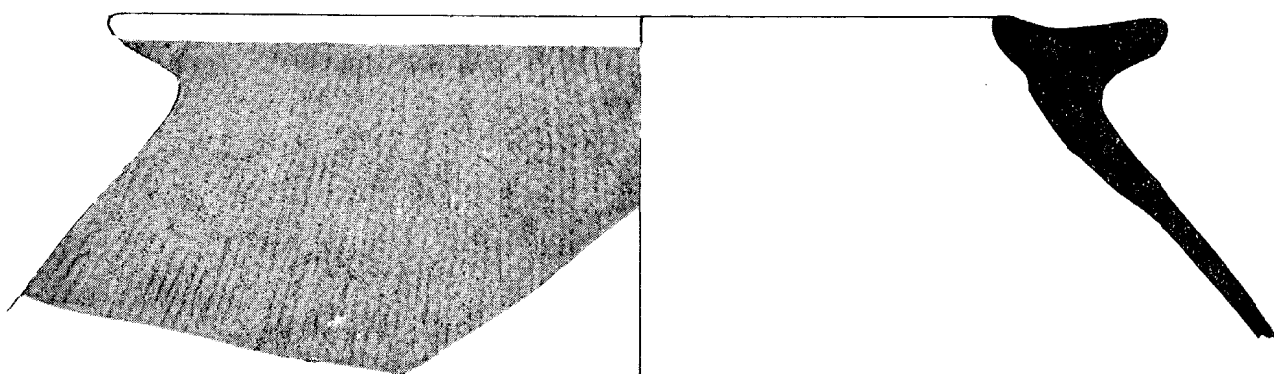
1



2



3

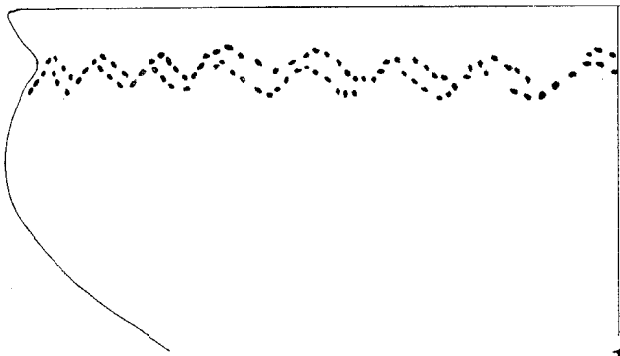


4

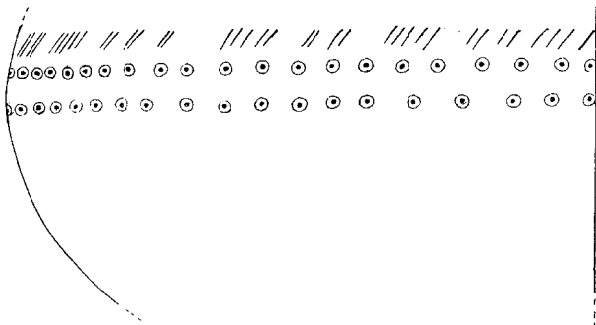


PLATE X VI

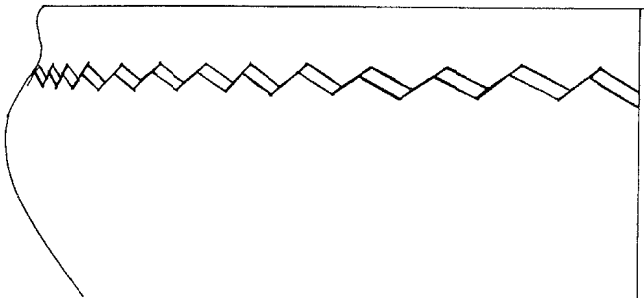
Vessels reconstructed, black wares - 1



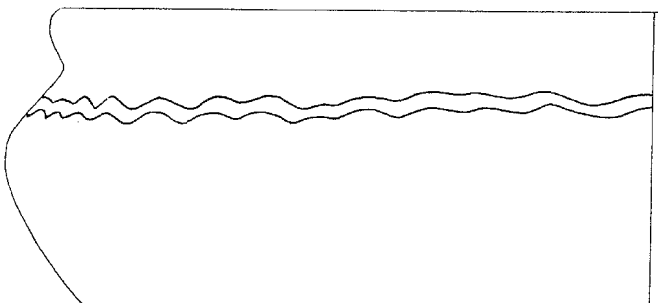
1



2



3



4



PLATE XVIII

Reddish brown wares - 2

- 1 Reddish brown ware without pattern
- 2 Burial jar, reddish brown ware with stamped cord mark pattern

PLATE X VIII

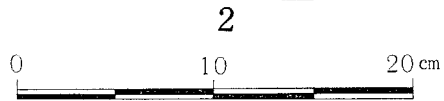
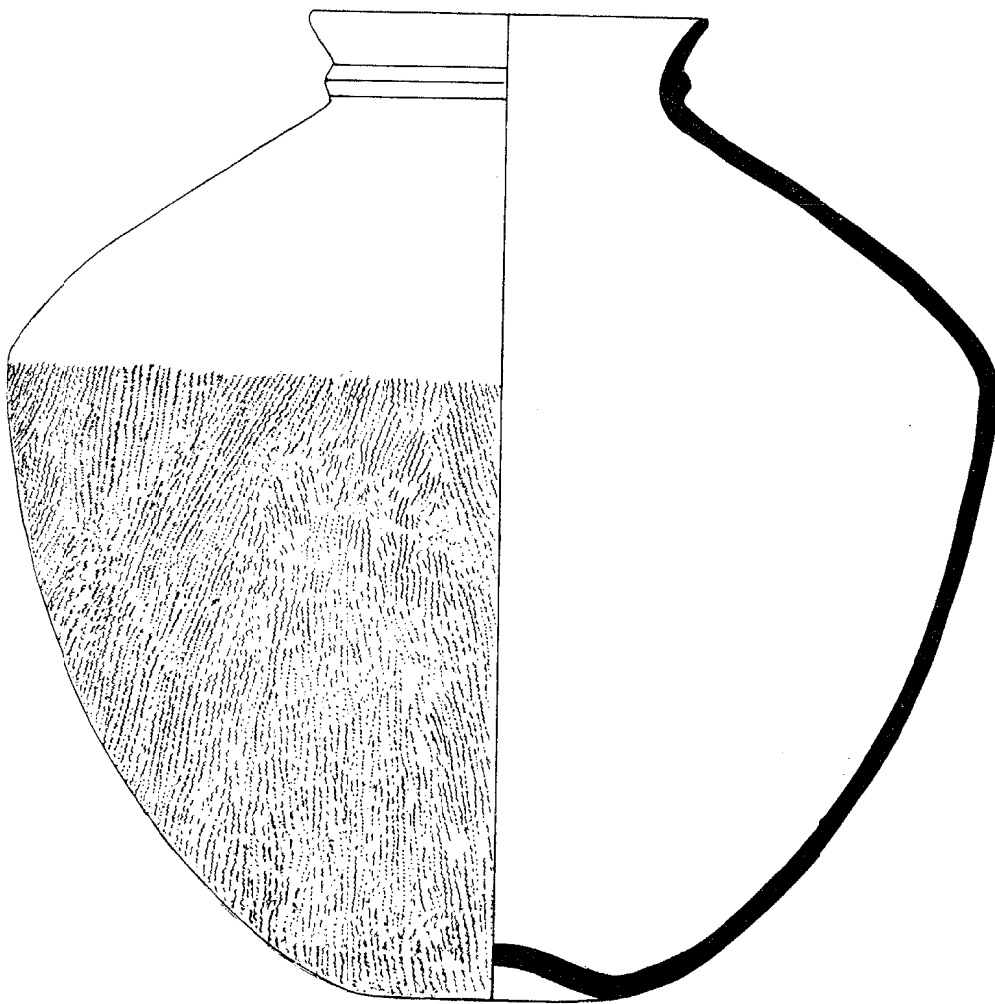
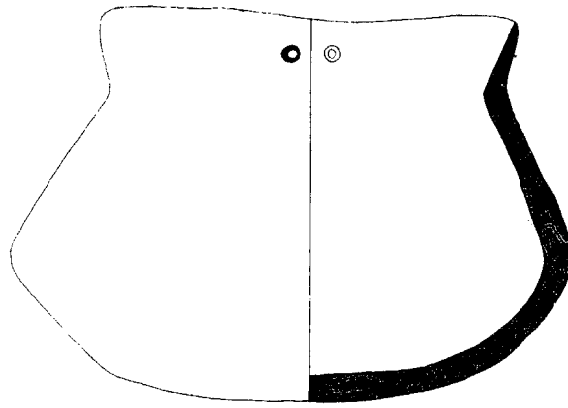


PLATE X II

Vessels reconstructed, black wares - 2

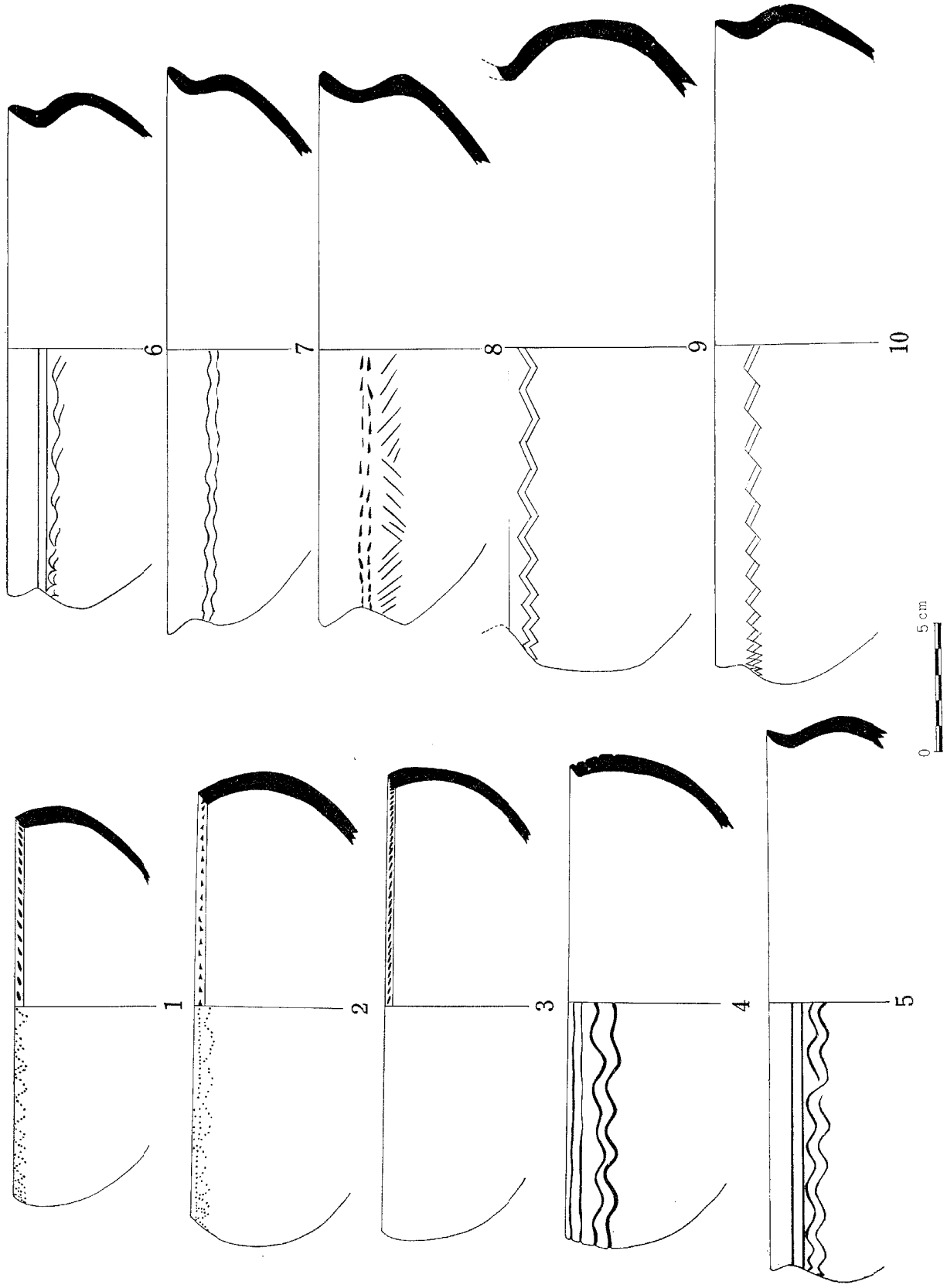


PLATE X X

Vessels reconstructed, black wares - 3

PLATE XX

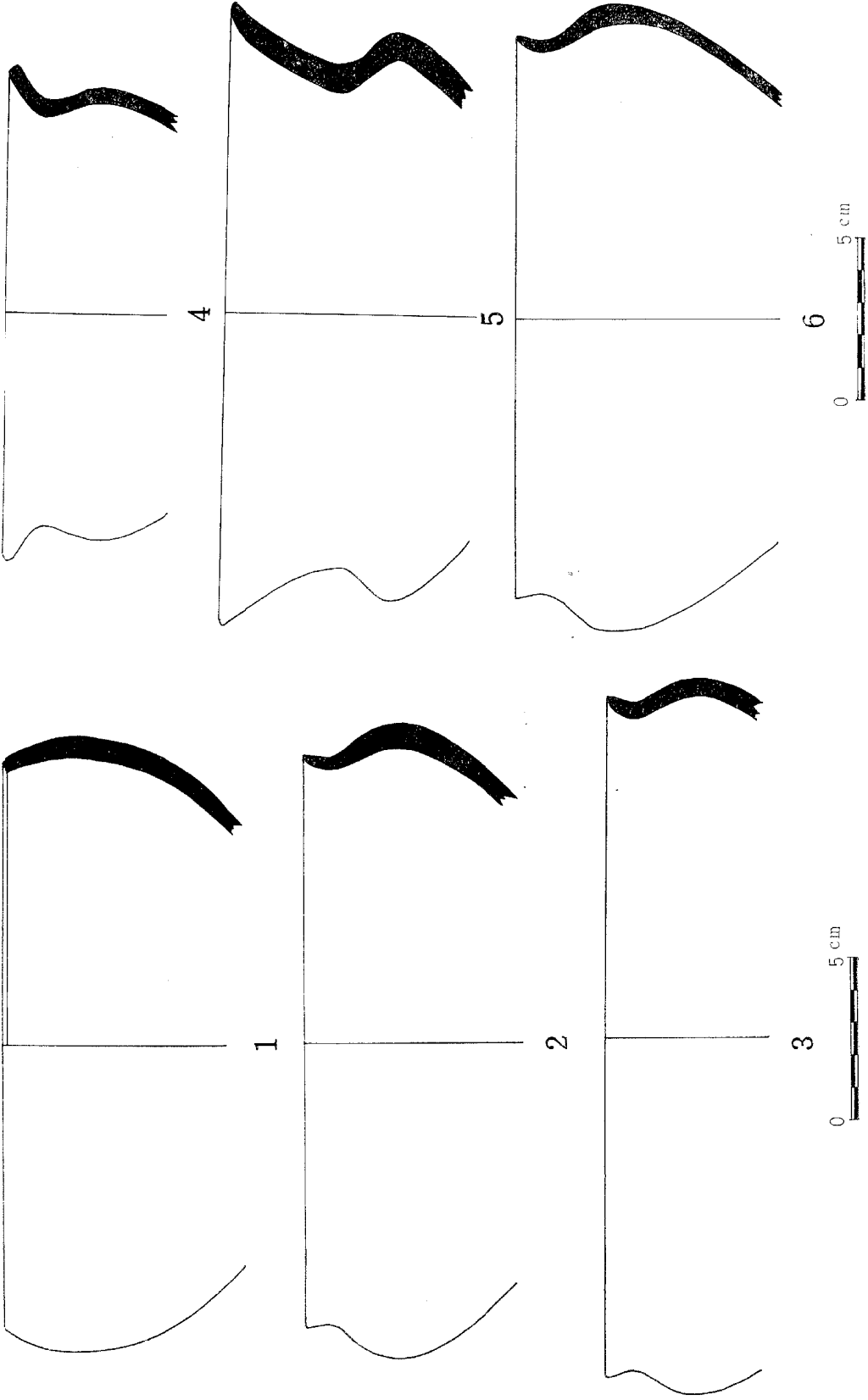


PLATE X XI

Gray wares

1,2 Lids

3-6 Rim profiles

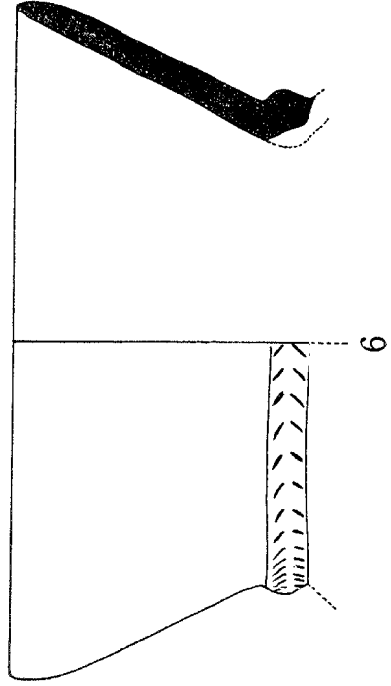
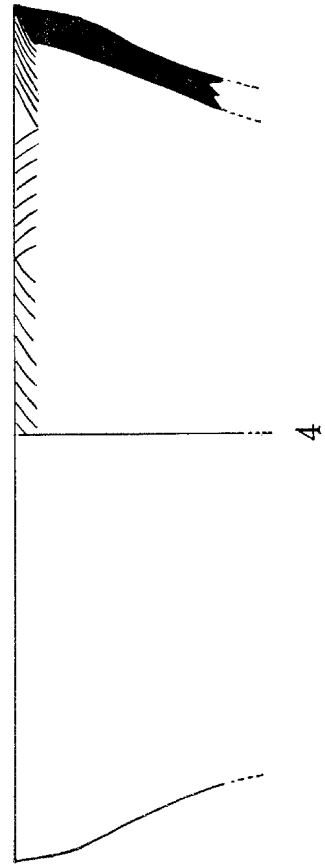
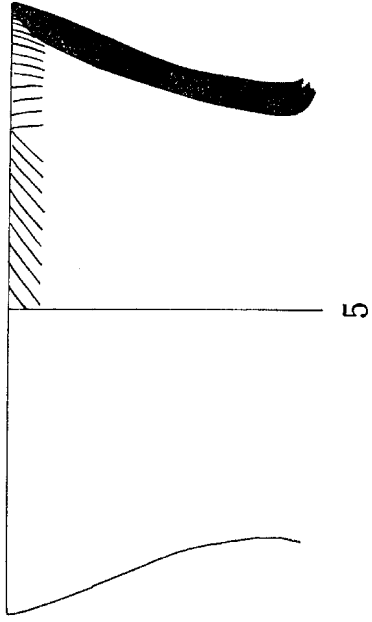
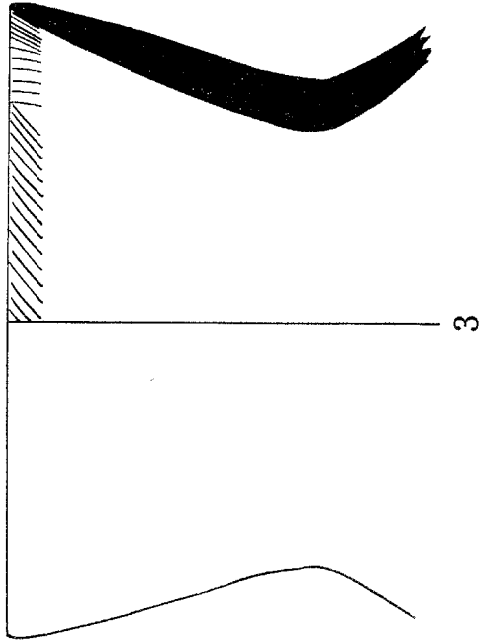
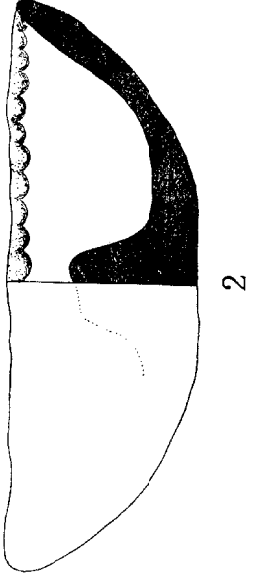
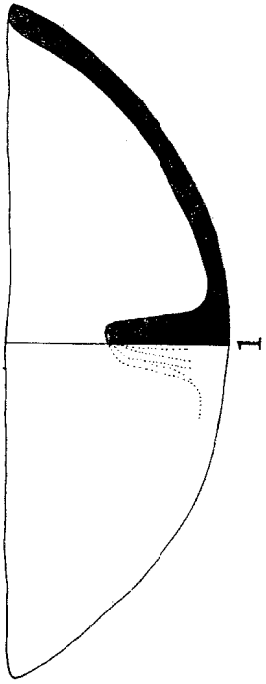


PLATE X III

Rubbings of wares with stamped pattern

1-3 Rubbings of blackish brown ware with stamped pattern

4-6 Rubbings of reddish brown or brown ware with stamped pattern

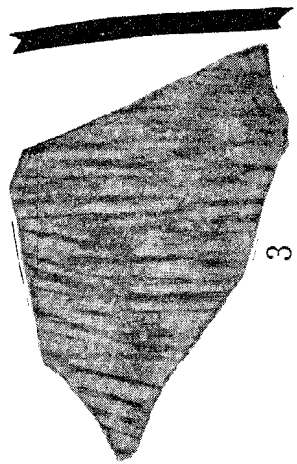
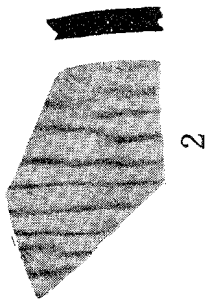
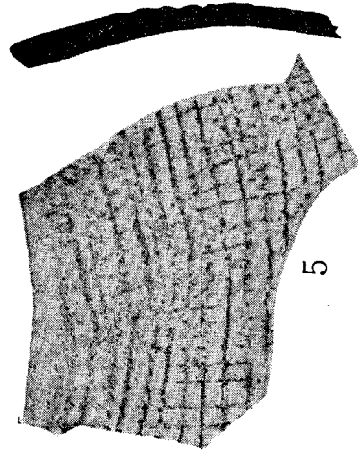
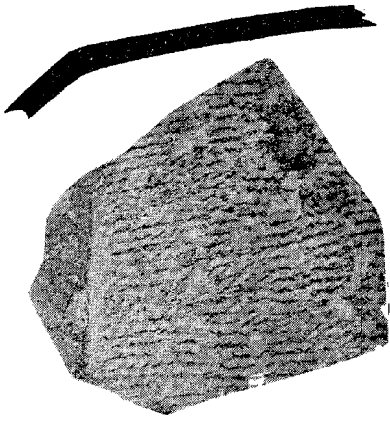
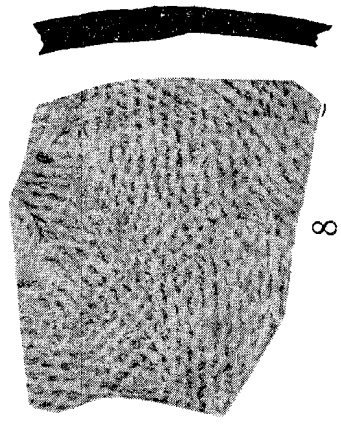
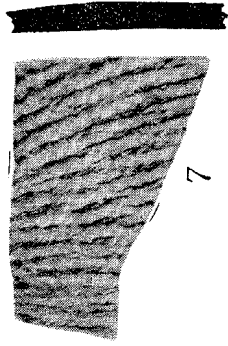
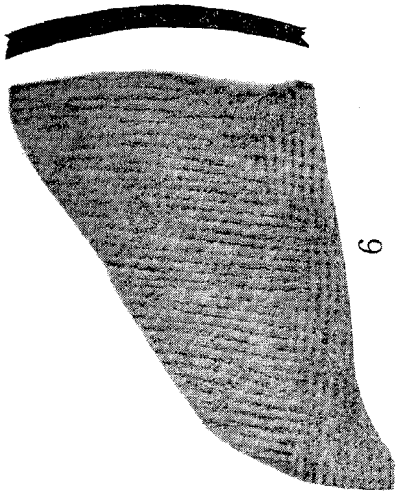
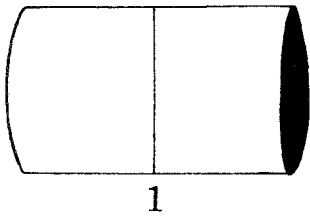


PLATE XXIII

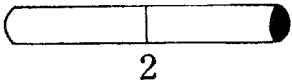
Bracelets (black ware) and deer antler with incised design

1—8, 10—12 Bracelets (black ware)

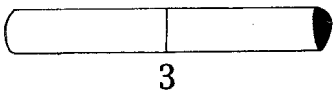
9 Deer antler with incised design



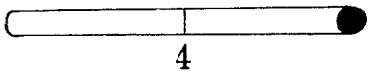
1



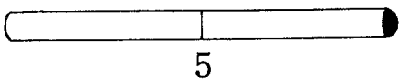
2



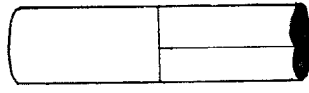
3



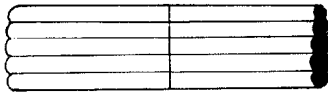
4



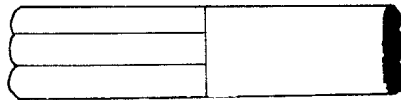
5



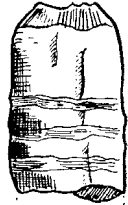
6



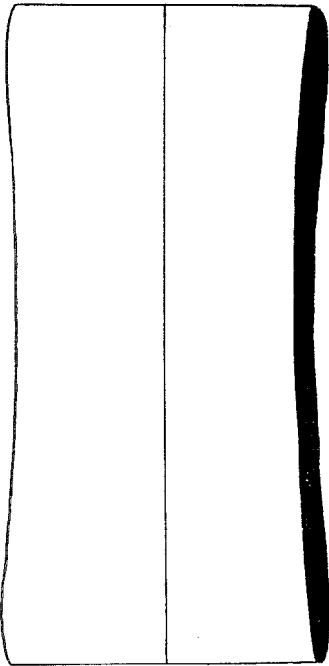
7



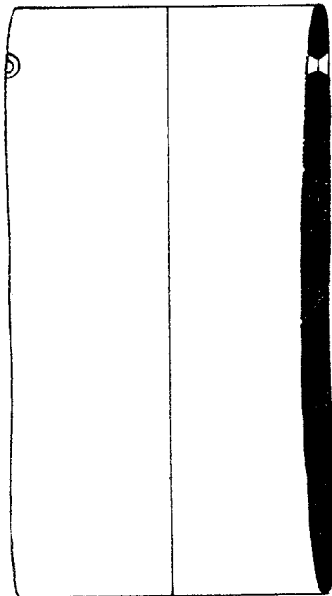
8



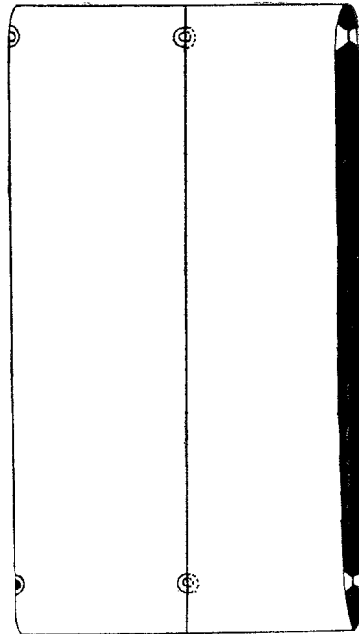
9



10



11



12

